

旅する女

南風 こまち

注意

本稿には連作鉄道ミステリ『旅する女』のネタバレが多分に含まれます。三文文士会公式ホームページにて全話無料公開されておりますので、本編を御一読の上でお楽しみ下さい。

『旅する女』は明治大学三文文士会において2019年夏号から2021年夏号にかけて連載された作品である。本稿をご覧になっている方の中には、既に本編をお読みになった方も多いだろう。しかしながら、私が卒業後に連載をやってみた、推理小説を書いてみたいと考える文士が現れるかもしれない。本稿は、今まで『旅する女』を応援して下さった文士や読者の皆様へのファンサービスであると同時に、未来の三文文士諸君へのやさやかな指南書(を騙る自慢話)として書き記すものでもある。

本稿は『旅する女』を執筆する上での苦労話、思い出話、本編では触れられなかった各種設定などをつらつらと書き連ねるものだ。しかしその前に、まずは筆者である私の来歴を語る必要があるだろう。作者のアイデンティティを抜きにしてこの作品を語ることは不可能だからだ。

*

*

私の生まれ育ちは高知県であるが、母は秋田県の出身である。幼い頃から盆と正月には秋田へ帰省していた。『旅する女』の基本的な舞台は秋田であるが、私自身秋田に縁深い事も理由の一つだ。他にも理由はあるのだが、それについては後述する。

私は幼い頃から鉄道が好きだった。幼少期の男児(ペンネームで勘違いされているかもしれないが、私は男性である)は多かれ少なかれ乗り物に興味を示すことが多い。しかし、私の場合は鉄道好きのまま成人してしまった。何鉄か、と聞かれると返答に困ってしまう。鉄道な

ら割と何でもたしなむのだ。雑食とも言う。

幼い頃からもう一つ好きだったものがある。本だ。寝る前によく母に絵本の読み聞かせをせがんだものだ。父方、母方双方の祖父も本が好きであり、よく私に本を買ってくれたものだ。小学校に入る頃には『マジックツリーハウス』シリーズが特にお気に入りだった。あれがアニメ映画化された時にはもう読者層年齢ではなくなっていたが、ついつい借りて観てしまった。嬉しさと共に懐かしさを覚えたものだ。

小学校3年か、それとも4年の頃だっただろうか？私は秋田駅の近くにあるジュンク堂である本と出会う。

アガサ・クリステイ『オリエント急行殺人事件』（ポプラ社）だ。当時の私は本は好きだったものの、ミステリにはほとんど縁が無かった。テレビアニメで『名探偵コナン』を観るくらいだった。そのため、この本を買ったのもタイトルに列車の名前が入っているという、ただそれだけの理由に過ぎなかった。

この時、私はまだ子供だった。周囲にクリステイ作品を読む同年代の人などおらず、大人からネタバレを食らうことも無かった。『オリエント急行殺人事件』をネタバレどころか推理小説と無縁な状態で読むことになったのは、今思い返すと幸運以外の何物でもなかった。この本を読み、当時の私は衝撃を受けた。まさに人生を変えた一冊だった。

私はここから推理小説にのめり込むことになる。しかし、当時の私には推理小説をどこから手を付けなければいいのかわかるはずもなく、したがって手あたり次第に読むという方策を取ることになった。私はここでまたしても幸運に恵まれる。児童向けの推理小説で鉄道を舞台にした本を見つけたのだ。松原秀行『パスワード地下鉄ゲー

ム』（青い鳥文庫）という本だった。

青い鳥文庫、と聞いてあまりピンと来ない方のためにざっくりとした解説を。青い鳥文庫とは講談社から出されている児童書レーベルを指す。『黒魔女さんが通る』シリーズや『若おかみは小学生！』などのシリーズをお読みになった方もいるのではないだろうか。なお私は読んでいたことは無い。

この文庫は児童向け推理小説の出版に熱心なことで推理小説愛好家の間では知られており、その二大巨頭がはやみねかおる『夢水清志郎シリーズ』と松原秀行『パスワードシリーズ』だ。私は例によって例のごとく、この二つのシリーズにどっぷりとはまることになる。

『夢水清志郎シリーズ』については後で語るとして、『パスワードシリーズ』についてはここで簡単に内容を紹介しておく。主人公はインターネット上に開設された塾で勉強する小学生。ある日、その塾の内部にミステリ愛好会のページができ、彼はそのメンバーになる。そこで同年代の友達ができ、普段はそこでパズルなどを出し合って交流を深め『電子探偵団』を結成するも、そのうち本物の事件に巻き込まれていくのだ。

うる覚えのために細部に間違いがあるかもしれないが、概ねこのような筋書きだ。私はこのシリーズの虜になった。幸いにも松原秀行氏は量産作家であり、『パスワードシリーズ』は現在でも新刊が刊行されている。私が出会った頃には既に十数冊のシリーズ作品が出ていた。そのシリーズの中で私はシャーロック・ホームズやエルキュール・ポアロといった名探偵たちを知っていくことになった。パズルあり、トリックあり、アクションあり、たまに甘酸っぱいロマンスあり……要は、ミステリ初心者の子供にうってつけだったのだ。

家では『パスワードシリーズ』小学校の教室文庫でホームズやルパンを読む日々が続いていたが、ある日転機が訪れる。私は自転車でポストに激突し、左足を17針も縫う大怪我をしてしまった。当然歩けるはずもなく、私はしばらく療養することになった。その時の暇潰しに親が持ってきてくれたのが赤川次郎の『三毛猫ホームズシリーズ』だった。推理小説としては比較的軽く読めるシリーズで、当時の私には少し早い場面もあったが、とにかく私はここから大人向けのミステリにも手を伸ばすようになった。

中学校に入り、私はアガサ・クリステイを読み漁るようになった。完全にはまってしまったのだ。ずっと海外物ばかりでは疲れるため、息抜きがてら読んでいたのが先述した『夢水清志郎シリーズ』だ。主人公三姉妹の隣に名探偵夢水清志郎（名探偵ではあるのだが、それ以前にとんでもないダメ人間である）が引っ越してくる場面から始まるこのシリーズは、本格推理小説へのオマージュや敬愛が随所に見て取れる傑作シリーズだ。このシリーズは今でも大事に表家に保管しており、時折懐かしく読み返してしまう。

クリステイ作品では特に長編のポアロものがお気に入りだったが、ここである人物を紹介しなくてはなるまい。私の従姉だ。彼女は私以上に推理小説が好きで、私に『夢水清志郎シリーズ』やクリステイ作品を勧めてくれた。要は私をミステリ沼に突き落としたりした人だ。ある日、彼女に勧められたのが有栖川有栖『マレー鉄道の謎』（講談社文庫）だった。変な名前の作者だな、と当時の私は不遜にも考えて読んでみたが、どうもこの本とはそりが合わなかった。鉄道とタイトルに銘打っているのに、鉄道らしい場面が冒頭の脱線事故くらいだったのだ。動機や背

景は、当時の私にはあまりピンと来ない方のためにざっくりとした解説を。青い鳥文庫とは講談社から出されている児童書レーベルを指す。『黒魔女さんが通る』シリーズや『若おかみは小学生！』などのシリーズをお読みになった方もいるのではないだろうか。なお私は読んでいたことは無い。

景にマレー鉄道が重要に絡んでくるのは分かるが、正直今でもそこまで好きな作品というわけではない（いつか私にもこの作品のすばらしさが分かるといいのだが）。

しかし、従姉が次に勧めてくれた本で私は有栖川有栖作品、そして国産ミステリにずぶずぶと沈んでいくことになる。有栖川有栖『絶叫城殺人事件』（新潮文庫）。この本は鉄道が絡まない短編集なのだが、私を虜にした。そのまま私は手あたり次第に有栖川有栖作品を読み漁るようになる。その中で、鉄道ミステリや時刻表ミステリと少しづつ出会っていくことになったのだ。

有栖川有栖作品はどれも面白かったのだが、読み進めるうちに私はある不満を蓄積していった。鉄道ミステリの少なさだ。

鉄道ミステリとは、鉄道が舞台になったりトリックに絡むミステリのことを指す（と自分では考えている）。その中でも特に時刻表を使ったアribaトリックを使うものは時刻表ミステリに分類される。鉄道ミステリはそれこそ先述したクリステイ『オリエント急行の殺人』の外にも国内外に様々な傑作があるものの、時刻表ミステリはほぼ日本だけの固有種だろうと有栖川有栖は自身のエッセイの中で語っている。

当時の私はまさに乱読とも言うべき勢いであれやこれやと推理小説を読み漁っていたものの、やはり鉄道ミステリや時刻表ミステリが格別お気に入りだった。それだけに、そのジャンルの作品数の少なさに不満を覚えていた。とうとう私は自力でその不満を解消することにした。読めないのなら自分で書けばいいのだ。

私が小説を書き始めたのは中学二年の秋、原稿用紙にへたくそな字で拙い文章を書き連ねていったあの日々のことは今でも覚えている。その内容については後述しよ

う。なぜか？ まあ読めば分かる。

高校に進学し、……いや、進学前だったかもしれない。私は時刻表ミステリの祖とも言うべき作家と出会う。鮎川哲也。有栖川有栖も心酔した、戦後日本を代表する本格推理小説作家の一人だ。氏が南満州鉄道を舞台に執筆した『ペトロフ事件』が世界初の時刻表ミステリとされている。堅牢なアribaトリックが些細なミスや発見から見破られていく様子は、まさに快感だった。この時の私はやたらと短編集がお気に入り、長編については大学進学後に読み漁ることになる。とにかく、鮎川哲也作品は私にとつて大きな憧れとして輝いていたのだ。当然私が書きたいと願う作品も鮎川哲也の影響を如実に受けることになった。

そこから紆余曲折を経て明大政経学部に入ることになった。実は私は当初、鉄道研究会とミステリ研究会に入るつもりだった。鉄研には問題なく入れた（のだが、入った後が大変だった）が、ミス研では実作を取り扱っていないと判明した。その場にいたミス研の担当者の一人が三文と掛け持ちしており、実作希望ということでそのまま私を三文のブースに拉致案内し、あれよあれよという間に私は三文の仲間入りしてしまった。あの日は風が強く寒い日で、中根先生と遙先生の格好が暖かそうで内心羨ましかった。三文では政経学部の生徒、そしてミステリを書く人は珍しかったようで、やたらと驚かされたのを感じている。なお、ミス研には二年後くらいに改めて加入することになる。今思えば、かなり回り道をしてしまった。

さて、軽い前置きのはずがかなり紙幅を割いてしまった。まあいい、ここからはいいよ『旅する女』執筆の裏話に移っていい。

* * *

あえて語弊がある言い方をすると、実は『旅する女』を執筆するのは三文に入ってからが初めてではない。私の中学高校時代に執筆した作品群そのものが『旅する女』の前身に当たる。中学高校時代の作品と三文で掲載した『旅する女』の関係性は、『新世紀エヴァンゲリオン』と『エヴァンゲリオン新劇場版』の関係に近いと考えてもらえたらイメージしやすいだろう。半分以上を新製したリメイク作品だ。

余談になってしまいが、私の実作の経験はどれだけ前からあるのかを遡って考えてみた。小学生の頃は漫画同好会に所属し、漫画を描いていた。確か市電の暴走を止めようとするうちに麻葉密売組織との抗争に巻き込まれ、しまいには宇宙人との対決を迎える家族を描いた東京下町のドタバタアクションコメディだったと思う。そのさらに前にはクレヨンと画家の話 주인공にした絵本みたいなものを書いた記憶がある。実家の屋根裏を引っ掻き回したら出てくるかもしれない。……三文に入ったのもなるべくしてなったのかもしれない。

話を本題に戻し、『旅する女』の裏話をする前に一つ触れておかなければならない作品がある。2019年春号に掲載した短編推理小説『遺された仕事』だ。三文に加入して最初に投稿した作品であり、当時の私にはかなり自信があった。

しかし、批評会での評判はあまり芳しくなかった。トリックはともかくとして作品に味気がない、という意見が多かったのだ。当時の私は内心でがっかりしたが、読者を満足させられないのはひとえに作者の責任だ。不評だった原因を考え、私はいくつかの仮説を考えついた。まずは、作品がトリックに偏りすぎたこと。推理小説

ということ、シンプルにトリックが崩れる様子だけを描こうとしたのだが、それが裏目に出てしまった。

では、なぜ裏目に出てしまったのか？ それは作者の筆力の問題はもちろんのこと、読者層を選べないという三文特有の事情があるのではないかと考えた。三文に掲載する作品は三文文士が主な読者だ。当時の三文文士の中でも、推理小説ばかり読み漁ってきた私のような人間はかなり異色な存在だった（政経学部の人間で地方出身で推理小説を書く鉄オタ、というのは個々を取り上げるだけならまだしも、総合すると色々と異色すぎる存在ではある。私は三文のSSR枠か？）。つまり、トリックで読者の目を引き、そして楽しませるとい手法があまり通用しないのだ。

ミステリに明るくない文士にもミステリを楽しんでもらうにはどうすればいいのか？ 一番手っ取り早いのは、トリック以外で興味を引くことだ。推理小説である以上、推理に直結する事件やトリックは堅牢に作る必要があるが、それ以外で興味を引くにはどうするか。魅力的なキャラクターを出すことやラブコメ、アクションで味付けすることに思い至るまでそう時間はかからなかった。

しかし、いきなりゼロから推理小説を書き、そこにラブコメやアクションを放り込むのは非現実的だ。ましてや、キャラクターをゼロから作成してブレのないように描ききるのは当時の私の力量では不可能だった（現在でも困難だ）。この時の私が中学高校時代の作品のリメイク、そして連載を構想するようになったのは必然だったと言えるかもしれない。

連載を行うには二つの困難がある。一つはそもそも継続できるか。三文は商業誌でないため打ち切りの危険性は無い。途中でやめるとなれば、それはひとえに作者の

力がしよせんそれまでということだ。私にも意地がある。そのような事態は避けたい。もう一つは、読者の興味を引き続けられるか、という点だ。読者の興味を引くにはラブコメやアクションなど手はあるが、あくまでも私が書きたいのは推理小説だ。ということ、主人公の過去を巡る謎を連載全体を貫く縦の糸にすることにした。

しかし、その謎というものが厄介だ。探偵が証拠を集め、推理をしてさあ謎解き、というもので終わる性質ではない。探偵にどう解かせたものか。その苦肉の策としてラブコメを使うことにした。探偵と犯人が結ばれるという破綻した設定で連載を始動させることにしたのだ。結果的には、主人公と探偵の恋愛模様が読者の目を引く役割を担うことになった。

『旅する女』の前日譚はこれくらいにしよう。ここまで書いて読み返してみると、当時の私は随分と思いつた策に打って出たものだ。推理小説を連載するとなれば、各話ごとにトリックは練るわ、アクションやラブコメは放り込むわ、それでいて連載全体のバランスを乱さないように各話ごとの個性を出さないといけない。卒業まで4年あるし、他にそこまで書きたいものもないし、行けるだろうと考えたのかもしれない。あの頃の私はまだ若く、それ故に無鉄砲でチャレンジャーだった。

* * *

ここからは二つの項目に分けて『旅する女』の裏側に迫っていこう。主要人物と各話に項目分けし、それぞれについて思い出や裏話を語っていく。ネタバレしまくるため、引き返すなら今のうちだ。

主要人物

全員を書くときりがなかったため、主要キャラクター5名を中心に記載する。

* 碓氷瑞穂（劔瑞穂）

『旅する女』の主人公である。青いアンダーリムの楕円眼鏡をかけたやや背の高い女性で、吊り気味の目とスレンダーな四肢（胸は無いけど度胸はある）とは後述する大和の談、黒髪ショートが特徴だ。タイトルの『旅する女』とはこの碓氷のことだ。

名前はかつてJR信越線を走っていた『SL碓氷』（高崎・横川）、寝台特急『みずほ』（東京・熊本・長崎）、山陽・九州新幹線『みずほ』（新大阪・鹿児島中央）からとっている。この連載では登場人物の名前の大半を列車、もしくはそれに類するものから取っている。この後の人物紹介でも順次取り上げるつもりだ。

特定のモデルはいないのだが、強いて言うなれば『銀河鉄道999』のヒロイン、メーテルを少し参考にしたかもしれない。といつても、結果的にはせいぜい体型くらいしか似ている部分がない。

三文で連載デビューする前は加越あずさという名前だった。苗字は「かえつ」と読むのだが、友人が軒並み読めなかったことから碓氷に改名した。下の名前は変更する予定は無かったのだが、色々あって変更した。

生まれは鹿児島県の出水。連載第五話で使ったトリックを優先して実家を決定した。父親が浮気相手との間に作った子供であり、父と義理の母に養育された。義理の

母は高知県大豊町の出身であり、病没。父は碓氷が高校生の頃に弟を殺害して逮捕され、そのまま獄死。碓氷は高校を中退し出水を離れ、親戚や知人を頼りにあちこちを転々とし、最終的に宮城県石巻市に辿り着く。

石巻では日常的な性暴力を同居人の井上とその友人である笠原から受けており、最終的には井上を刺殺してしまう。しかし殺害直後に東日本大震災に巻き込まれ、死体や現場が津波に吞まれて事件そのものが消えてしまう。そのため、殺人や震災に対して多重的なトラウマを抱える。本作では彼女がそのトラウマを乗り越え、自分の罪に立ち向かい、そして救われるまでを描いている。

石巻ではアパートの管理人をしており、そこへ後に夫となる劔礼士が入居してくる。震災後は劔の故郷である秋田に渡り、居酒屋『かま田』の店員として働き始める。そこから様々な事件に巻き込まれ、そして劔と結ばれていくまでを描いたのが本作だ。

性格については、実は作者にもよく分かっていない。基本的に真面目で素直な性格をしているため扱いやすいキャラではあるが、時折頑固な所を見せて作者を振り回すこともある。真面目ゆえに思いつめやすく、過去を乗り越えるまでは自分を責めることも多かった。また、どちらかと言うと頭よりも体が先に動くタイプであり、作者の想定に反してアクションシーンで女子力(物理)を見せてつけるようになった。

旧作では劔より後の登場。当初は劔を主人公にした作品のスピンの主役としたが、そのスピンオフ作品が予想以上に多く量産できてしまい、その過程で劔の妻という設定が生まれた。旧作では二人が恋人同士だった時の様子はあまり描かれていない。劔から主役の座を横取りするというなかなかの女性だ。連載するにあたって、

劔と碓氷の関係を夫婦から恋人未満にリセットしたのは最大の変更点だ。また、旧作では専業主婦として登場していたものを連載では居酒屋『かま田』店員として登場させたのも大きな変更点だ。

旧作では劔とおしどり夫婦という設定であった。本編でもその設定は明記されていないものの変更は無く、後日譚として語られることがあるかもしれない。また、旧作では若い娘を病気で亡くしている(臓器移植をテーマにした作品をコンクールに応募するための設定。なおコンクールには箸にも棒にも掛からぬ結果となった)が、本作ではその設定を削除している。

連載最終回では高知で霧島と共に謎解きをするが、旧作では謎解きに絡むシーンは無かった。碓氷に推理力を持たせるには紆余曲折があったのだが、それについては作品コーナーで語ろう。

『旅する女』のタイトルの由来だが、実はこれは仮タイトルのもりだった。しかし、そのまま定着してしまっただけだ。旧作でも劔が碓氷の過去を暴き、そして結婚を申し込むという展開は変わらないのだが、そこから碓氷は長い放浪の旅に出る。その様子を描こうとして計画倒れに終わった作品のタイトルが『旅する女』なのだ。計画では日本中を鉄道で旅し(事件には巻き込まれない)、そして秋田に戻ったタイミングで劔と再会するという話にするつもりだったが、このラストは連載最終回でようやく形にすることができた。

実は、一番長い旅をしていたのは碓氷よりも作者だったのかもしれない。作者のペンネームも列車由来なのだが、それについては後述する。

*劔礼士

『旅する女』では探偵役を担い、最終的には碓氷の夫となる。黒縁眼鏡に優しいな垂れ目、あまり脂っけの無い若白髪交じりの黒髪はテキトーに切っている。左頬と背中に傷跡があるが、これは第七話で負傷した時のものだ。大柄なのは作者自身を投影しているが、身長は私より少し大きめの185センチ。私と違って筋肉質なのは、そっちの方がカッコいいからだ。

名前は苗字が昔の北陸本線の寝台特急『つるぎ』(大阪(富山)、北陸新幹線『つるぎ』(富山(金沢)から取っている。当初はJ.R徳島線を走る『劔山』(徳島(阿波池田)から取るつもりだったのだが、劔山さんだと何だか言いにくいので劔とした。下の名前は礼の字を鉄道愛好家で漫才師の中川家礼二から、士の字を漫画『銀河鉄道999』原作者の松本零士から取っている。

特定のモデルはいない。完全なオリジナルキャラだが、知人から『となりのトトロ』に出てくる父親に似ていると指摘されたことがある。言われてみれば、性格とかが似ているかもしれない。また、同じくジブリ映画『風立ちぬ』の主人公堀越二郎にどことなく似ている、という指摘も受けた。愛妻家であることと乗り物がよく出てくる作品なのが類似しているように思われる所以かもしれない。

旧作では劔隼人と名乗った。三文デビューに合わせ、苗字を劔に変更した。これは劔岳から名前を取った寝台特急『つるぎ』から名前を取っているため、実態に即しての改名となった。ただし、劔岳は劔岳とも劔岳とも表記するため、改名の必要は無かったかもしれない。隼

人は、これまた色々あつて改名した。

生まれは秋田県横手市増田。作者である私自身、母方の祖母がこの地の生まれであり縁深い場所だ。幼い頃から鉄道が好きで、その憧れを抱いたまま鉄道マンになった。鉄道学校で釜田に指導を受け、JR東日本に入社後は仙石線の乗務員を担当、この時に入居したアパートの管理人が確氷だった。震災を機に秋田へ転勤が命じられ、確氷を連れて秋田へ帰還。その後は秋田新幹線の運転士として乗務し、連載に至る。

旧作当初こそやや神経質な性格をしていたが、途中から温厚でしっかりした性格へと変化していった。連載でもその性格には大きな変更を加えていない。鉄道員としてのプライドがあり、生来の愚直さと相まってそれは高い運転技術として反映されている。穏やかな性格ということもあり、連載初期には読者から50代と勘違いされたこともある。作者としても素直な性格と鉄オタという親近感ゆえに一番扱いやすいキャラだった。

確氷を津波から救い出した張本人であるが、彼自身も被災者である。作中では刃のトラウマなどについては特に触れていないが、全く怖くないわけではない。

旧作では最初期から探偵役として登場している。垂れ目なのは後に柔らかな性格を表す意味合いを持つようになったが、当初はただキャラクターとしての肉体的特徴に過ぎなかった。旧作で最初の作品を書き上げた当時の私は『刑事コロンボ』にはまっており、刃の言葉に愛妻の存在を匂わせつつ妻本人は出さない、という方針だった。後に確氷の前身である加越が誕生し、そして主役を奪われることになるのは作者としても想像していなかった。

探偵役を担っているものの、推理小説やミステリに造詣があるわけではない。連載でも第七話のように刃が探

偵として出てこない話があるが、旧作では刃そのものが出てこない話もあった。これは一時期、釜田や霧島にも探偵役を担わせようと考えて書いてみた時期があり、その名残だ。

本編ではほとんど使わなかったものの、かなりの酒豪という裏設定がある。実家は旅館であり、父は蕎麦屋を営んでいる。これは私の母方の祖母が生まれた実家の設定をそのまま模写したものだ。

*釜田神威

本作では居酒屋『かま田』の店主として登場するが、基本的に刃や確氷の味方として割と何でも使えるキャラクターだ。やや細身の短髪。もうすぐ本厄を迎えるおっさんで、糸のように細い目がトレードマーク。パツイチであるが、この辺の話は第二話で詳説されている。

居酒屋『かま田』は秋田駅東口から徒歩3分くらいの所に軒を構える店だ。第一話ではハイツの一階部分に入居していたが建物が吹っ飛び、それ以降は近所の空き家を改装して一階部分を店舗、二階部分を住居とした。これが作中での設定だが、実はこの居酒屋『かま田』かつて実在した店なのだ。立地は作中と同じで、建物一階が居酒屋、二階が理髪店だった。今は建物は解体され現存せず、跡地は駐車場になっている。寿司と唐揚げが美味しい店だった。作中でも店内の構造やスタイルなどは、記憶にある限り忠実に再現している。詳細は掲載した図をご覧ください。

下の名前はJR函館本線の特急『カムイ』から取っている。苗字は実在した『かま田』から名付けた。秋田では鎌田の方が一般的なのだが、機関車を指す鉄道用語の「釜」をあてがった。

旧作では『男はつらいよ』の寅さんをモデルにしたキャラで、割と喧嘩っ早くも人情に厚い、頼れる兄貴分キャラクターとして描いていた。段々と寅さんから逸脱したキャラに変化していったものの、基本的な性格は変わらずに連載に受け継がれている。フットワークの軽さは作品随一であり、作者の意に反して動き回る厄介なキャラだ。この引つ掻き回し癖は後に確氷や大和にも伝染し、ますます作者を困らせることになった。逆に、展開に詰

まった時にはとりあえず釜田を出しておけば話が進むというありがたいキャラでもある。

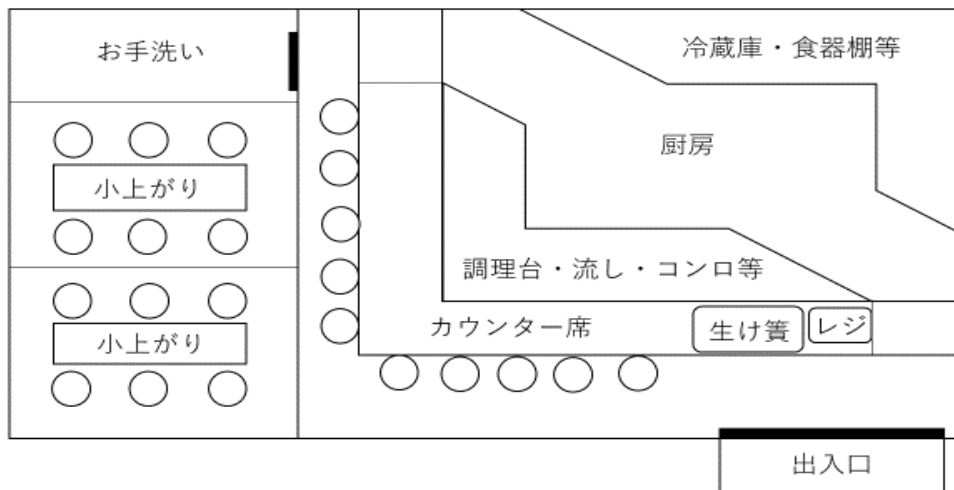
旧作では鎌田新平と名付けたが、なし崩し的に鎌田神威へと名前が変わっていった。新平と名付けたのを忘れて新たに神威と振り直し、新平という名前を思い出した頃には修正不可能になっていたのだ。

連載を行うにあたり、設定を新たに振り直したキャラクタード。旧作では山手線の運転士を経た後に離婚、居酒屋を開くという特に設定らしい設定も無い風来坊だった。三文デビューに合わせて設定を変更。鉄道学校の教官だったが脱サラして居酒屋を構え、剣は教え子の最後の一人という設定にした。バツイチなのは連載前から変わらなずだ。作中では触れられていない裏設定だが、生まれは横浜市都筑区中川だ。

読者はここで、中学高校時代の作品にどうして居酒屋が出てくるのかと不思議に思うかもしれない。これはTBS系の番組『吉田類の酒場放浪記』に影響を受けたためだ。吉田類は地元高知の名士(?)であり、作品に美味しそうな描写を入れたいと考えていたために参考にすることにしたのだ。

釜田の愛車は白いトヨタ・マークIIであるが、これは母方の祖父が生前に乗っていたものだ。これでよくゴルフに行っていたのだが、今や遠い記憶だ。釜田が愛車を駆って繰り広げるカーアクションも連載のどこかに組み込んだかったのだが、結局できずに終わってしまった。

居酒屋『かま田』店内図



*霧島翼

運輸安全委員会委員、という肩書を持っているもの本作では国土交通省の人間として登場することが多い。厳密には運輸安全委員会と国土交通省は別物なのだが、便宜上「ごたませ」にして描いている。設定からして割とい加減なキャラだが、剣の飲み友達として認識するのが一番分かりやすいのではないだろうか。

オールバックの黒髪をした小男で、どんぐりのような目をしている。やや色黒で、話す言葉には僅かに地元のなまりがある。本編に絡むことはほとんどないが、妻子持ちだ。

名前の由来はJR日豊本線の特急『きりしま』(宮崎〜鹿児島中央、山形新幹線『つばさ』(東京〜山形・新庄)から命名した。中性的な名前であり、いつそのこと連載に合わせて女性として描くことも検討したキャラだ。めんどくさいために没設定にしたが。

霧島を出したのは警察とのパイプを持たせるためだ。剣は探偵役とはいえ、あくまでも一般人ではない。そのため、いきなり警察と接点を持たせるのは厳しい。そこで、鉄道と警察の両方に繋がっているような役回りとして役人を入れることにした。役人らしからぬテキトーな性格をしているのはそうしないと話が進まないためだ。事件を持ってきては居酒屋『かま田』で剣に解かせるという展開は、旧作から連載に引き継がれたスタイルの一つだ。

生まれは高知県大豊町豊永。鉄道で行けるとはいえかなりの山奥で、東京で例えるなら奥多摩辺りがイメージに近いかもしれない。旧作では高知県出身ということだけは決めていたものの、詳細までは決めていなかった。

連載最終回で組むトリックを優先して実家が決まったという確氷と同じパターンだ。中学高校時代には英語部に加入していたが、この設定は作者自身を投影したものだつたりする。

気さくな性格でありながら頭の回転は速い。剣がいな場合とは間違いなく探偵役を担うことになるだろう。事実、旧作の一部では剣を差し置いて謎を解いたことが何度かあり、その名残は連載第七話に見受けられる。旧作当初は愚痴っぽい性格をしていたが、その片鱗は今でも顔を出すことがあり作者としても書いていて楽しいキャラクターだった。

霧島は主要キャラではあるものの、連載での登場回数はやや少なめだ。第二話や第六話のように霧島が全く出てこない作品も多い。旅先で確氷や剣が事件に巻き込まれるタイプでは、わざわざ事件を持って霧島を呼び出す必要性が無いためだ。また、実は剣との書き分けに苦慮したキャラクターでもある。アニメとかなら映像や声でいくらでも差別化できるのだが、文章だとしても性格や口調が類似しているキャラの区別に苦労する。

旧作からほとんど設定を変更していないキャラクターで、名前も唯一据え置きで変更が無い。連載最終回では霧島の実家で殺人事件が発生するが、霧島の実家設定は今回の連載で初めて付け加えたものだ。連載最終回で運転しているのは黒い三菱・ディアマンテであるが、これは私の幼少期に父が運転していたものだ。

旧作では剣と共に第一作から登場。といっても、剣に事件を持ってくるのではなく剣と共に事件に巻き込まれる話でデビューした。国交省の人間として現場で奮戦する剣を陰ながらサポートする姿は、連載第三話の元ネタになった。

*大和叶

本連載では第二話で初登場。寝台特急『トワイライトエクスプレス』のホールクルーとして初登場し、そこから居酒屋『かま田』の店員としてレギュラー入り、確氷の後輩となった。

ポニーテールをした茶色い癖っ毛の女性で、確氷とは対照的に低身長で肉付きのいい体をしている。かつて婚約していたが、第二話で婚約者が殺害されてしまったために独身だ。

苗字の由来はかつての夜行急行『大和』（東京と和歌山市）。旧作ではJR西日本の大和路快速（大阪環状線と奈良・加茂・五条）から苗字を取って大和路と名乗っていたが、連載に際して短縮した。下の名前は『銀河鉄道99』に登場するキャラクター、カノンから取った当て字である。アンドロメダ編では出てこなかったキャラクターのため、知らない人も多いキャラクターなのではないだろうか。

連載では唯一生まれ育ちや来歴がほとんど決まっていないキャラクターだ。決める必要性が無い、というのが一番の理由だが、作者としてもじっくり設定が思いつかなかつたのだ。旧作でも特にこれといった設定は無く、それをそのまま受け継いだとも言えるかもしれない。

初登場の第二話では由緒正しい豪華寝台列車の乗務員という立場から穏やかな性格をしていたが、それはあくまで営業上の姿。蓋を開けてみたらちよつと生意気ながら明るい性格であり、第三話を執筆した時には作者にキラ崩壊を疑われる始末だった。批評会でキラ崩壊を指摘されなかつたのは僥倖と言うべきだろう。釜田と同様にフットワークの軽い質だが、第三話ではそれが確氷

の背中を押すことになる。確氷と大和を先輩後輩関係で書くのは初めてであり、書きながら新鮮だったのを覚えている。

職場で一緒になる確氷や釜田の事は慕っているが、剣や霧島とはあまり関係を持っていない。特に剣に対しては確氷の存在もあり、一歩引いた立場から接している。

この辺の関係を連載でもう少し描きたかった、という思いはあるが今更手遅れだ。

旧作では『トワイライトエクスプレス』の乗客として初登場。剣や霧島といった他のキャラと比べると1年くらい遅れての参戦となった。元々は列車の乗務員だったが退職し、被害者の秘書として警察から捜査を受けた。その後、居酒屋『かま田』の店員となり、釜田と二人で店を切り盛りすることになる。旧作では確氷が居酒屋の店員ではないため先輩後輩関係にならず、連載と大きく関係性が異なる。仲のいい女友達といった関係だったが、連載のように憎まれ口を叩き合ったりするようなフラクナ関係ではなかった。

正直、大和の役割は釜田に代替させることも可能であり、そこまで大和を出す必要性は無いのが正直なところだった。出してよかつたキャラであることは間違いないし、愛着はあるのだが。連載に出した理由も、女性キャラが確氷だけではバランスが悪いし、女友達を出したいというもので、そんなに大した理由ではなかった。しかし、釜田同様に狂言回しとしての役割が大きく、場面繋ぎに使いやすいキャラクターで重宝した。

連載第七話から姉が登場するが、これは最終回で複数の事件を同時に起こすのに事件に引きずり込む役割を担わせる適役がいなかったために急遽造り上げたものだ。第七話と最終話の間に姉は結婚し苗字が大和から比叡に変わ

つたが、これは連載最終回で苗字の変化が鍵の一つになることを示す急ごしらえの伏線であった。

*警察関係者

旧作から設定を概ね一新し、名前を引き継いだ以外は大幅な変更が加えられた。警視庁の八雲・沖ペアは作者の想像よりもずっと出番が多くなった。名前だけは処女作に出ていたものの、チョイ役に過ぎず5年以上の空白を経ての再起用となった。名前はJR伯備線の特急『やくも』(岡山く出雲市)、JR山陰本線・山口線の特急『スーパーおき』(鳥取・出雲市く山口、ただし正確な漢字表記をすると『隠岐』となる)から取った。

秋田県警の矢野・犬塚ペアは私の高校時代の友人の名前をもじったものだ。後述するが、私の部活仲間を登場させた作品を旧作で執筆したことがあり、その時に誕生したキャラだ。旧作では宮城県警の人間として出したが、連載にあたって若干の役職と性格変更を加えている。本当は第二話だけに出演するゲストキャラの予定だったものが、がっつりと最終回まで出演する主要キャラになってしまった。恐るべし矢野・犬塚ペア。

旧作から引き継がれた警察キャラはこれくらいで、いずれも原型を留めていない。

どのキャラにも愛着があり、つつい語りすぎてしまった。キャラ紹介はこれくらいにして、次は各話(この裏話へと筆を進めることにしよう)。

各話紹介

第一話 雪国隧道(2019年夏号掲載)

ページ数……8(改稿後)

文字数……11849(改稿後)

記念すべき第一作だが、実はトリックは同年春号に掲載した『遺された仕事』の使い回しだ。春号の作品はトリックにこそ自信があったものの、作品としての評価はあまり高くない悔しい思いをした。そのリベンジのつもりで書いた……と言えば聞こえはいいのだが、実のところ早くもネタ切れ気味でやむなく既存のトリックを流用してお茶を濁したという側面も大きい。

作品内容としては居酒屋『かま田』を舞台にした安楽椅子ものの短編だ。連載で唯一ページ数が一桁の作品になったが、今リメイクしたら間違いなく分量が増えるだろう。ちなみにこの作品の初稿は当時長編を出していた宇津蟬せみこ先生に対抗して一晩で書き上げた。

旧作から登場人物の設定や関係性をリニューアルして書いた初の作品であり、旧作で書き慣れていた作者からすると違和感があった。しかし、元々は自分で生み出したキャラクターだ。筆を進めるうちにすぐに馴染んでくれた。

トリックについては春号で指摘された穴を修正し、より完成度を高めることができた。春号掲載作品では時刻表の inputs が三文規格と相性が悪いことが判明したため、パワーポイントを作成し、その画像を貼り付けるという荒業に打って出ることにした。この後、筆者は毎回のよ

うにパワーポイントに苦しめられるようになる。

前作があまりにも散々な評判だったため、人間描写を付け加えただけで批評会での感触ががらりと変わったことに驚いた。ただ、この作品でも人間味の不足から脱却しきったとは言えず、より一層の精進が求められた。これに応える動きが第二話に繋がっていく。人間模様に読者が食いついてくれたことで、剣と碓氷の関係性にフォーカスする今後の展開に勝機を見た。

この作品では剣と碓氷の恋愛模様はまだ描かれていない。連載を開始するにはやや淡泊な始まり方だったように、連載という一大プロジェクトを前に批評会での反応はあまり芳しくなかったのが正直な感想だ。ただ、トリックは使い回しだし序盤で展開もそこまで進んでおらず、妥当な反応ではあったと思う。

連載において一つ重要なのは、読者に続きをせがませることだ。興味を維持しなければ読者は離れていく。三文は文士という固定客がいるためそればかりを意識する必要は必ずしもないが、かといって全く意識しないわけにもいかず、地味に連載全体を通して苦慮したポイントだった。現に、第一話では「次回作とのつながりが見えにくく、あまり連載という感じがしない」という批評も頂戴した。

既にこの話から碓氷の暗い過去を匂わせる伏線は張っているが、回収はいつになることやらと当時の私は考えていた。できればこの連載には和泉を出て3年になるまでには決着をつけて連載を完結させたいと考えていたが、その計画は徐々に狂っていくことになる。

この作品の批評が終わり、第二話の執筆を進めている時のことだ。作者にとつて衝撃の事実が判明する。三文のサークルボックスを漁り、過去に出版された文集を整

理する企画が建てられた。私も部室の整理に駆り出されたのだが、そこで葉桜先生に教えてもらった。三文は設立して約30年の歴史があるが、連載が完結した例が無いというのだ。

私自身は全ての号に目を通したわけではないため、真偽のほどは確かではない。しかし、初期の文集から目次には連載作品の存在が示されているものの、最終話などと銘打たれた作品は確かに目次には無さそうだった。先輩方に聞いてみても、連載が完結したという話は聞いたことが無いという。

当時の三文において、連載を行っていたのは私と中根先生だけだった。後に藤田先生と雪嶋先生、葉桜先生が連載を開始するが、この文章を執筆している2021年12月現在で藤田先生は未完のまま卒業、他の先生方も連載中だ。中根先生は私と同じタイミングで連載を開始し、2021年秋号現在も連載中だ。

30年に渡る「三文で連載は完結しない」というジンクスを前に私は燃えた。三文に入った以上、在籍中は全ての文集に寄稿したいと考えていたのだが、もしかしたら私が三文で初めて連載を完結させる文士になるかもしれない。そう考えると、何としてもジンクスを破りたかった。連載を行う以上、キャラクターの人生に責任を持ち、描き切れることは作者の義務だと考えていたことも相まって、私は何としてでもこの連載を完結させると決意したので。

第二話 黄昏に死す（2019年秋号掲載）

ページ数……61（改稿後）
文字数……98577（改稿後）

第二作、連載では初となる長編作品だ。連載を通して、いや、今までの三文での活動を通して一番楽しく書けた作品はどれかと聞かれたら、私は間違いなくこの作品を選ぶだろう。

豪華寝台特急『トワイライトエクスプレス』の車内で発生した殺人事件に確氷と剣釜田が巻き込まれる話だ。霧島は出てこないものの、新レギュラーとなる大和が初登場している。タイトルの『黄昏』は列車の名前、そして事件の発生時刻とを掛け合わせたダブルミーニングのつもりだ。オチに「誰そ彼は」を付け加え、トリプルミーニングと言いたい張ることもできないはない。

この作品の事件は2013年5月4日に発生したものだ。現実では私がまさにその日に『トワイライトエクスプレス』で旅をしたのだ。大阪から札幌まで、片道1500キロを22時間強で走る夢のような列車だ。2015年3月をもって北海道へ向かう運用から撤退してしまったが、その最終運行の様子は連載最終回のおまけで書き記した。この第二話を書いた時から連載の幕切れは概ね決まっていたのだ。

実は、私が現実にもこの列車に乗った時、ちょっとした事件があった。食堂車でのダイナーを終えて自室に戻った時の事だ。部屋はカードキーでロックがかかるのだが、カードキーをいくらスライドしてもロックが解除できない。通りかかった車掌さんがマスターキーで開けてくれたが、列車の振動で鍵が緩み、ロックとオープンの間

で反応しなくなってしまうのだという。たまにあることだと教えてくれた。

そう、この時、私の部屋は偶然の産物とはいえ密室だったのだ。いつかこのトリックで作品を書いてみたい。そう思ったのは実際に原稿用紙に向かい始める半年くらい前の事だった。この列車は私が推理小説を書くきっかけを与えてくれたという意味でも、私の人生を大きく変えた。

『トワイライトエクスプレス』の虜になった私は旅を終えてから鉄道雑誌などを買い漁り、徐々に知識を蓄えていった。実際にこの列車を舞台にした事件を執筆したのは中学3年の頃、夜な夜な原稿用紙を汚い字で埋める日々が続いた。下り列車と上り列車でそれぞれ別々の事件を第一部・第二部として起こしたのだが、下り列車のトリックが先述した偶然の産物による密室殺人だった。第一部・第二部共に原稿用紙で100枚くらいの作品になった。今思えば、この頃から長編を書く片鱗を見せていたのかも知れない。

何はともあれ、私にとって『トワイライトエクスプレス』の旅はかけがえのない思い出であり、今でも私の心に燦然と輝いている。だからこそ、この連載で再び旅ができることは非常に嬉しいと同時に、書いていてとてもワクワクしていた。

この作品を執筆する上では、ミステリにも気を配ったものの、それ以上に自分が実際に経験した旅をできる限り再現しようと腐心した。そのため、伏線は張りつつも実際に死体が出てくるのは物語中盤になってからだ。前半は完全に私の日記みたいなものだ。ちなみに確氷が泊まった部屋と犯人の白雪が泊まった部屋が、現実には私と家族が分乗した部屋だ。

執筆においては過去に収集した『トワイライトエクスプレス』に関連する書籍が非常に役立った。自身の記憶と照らし合わせながら、沿線の観光案内や食事、トリックに関わる車両構造、舞台裏となる乗務員の活躍について迫りに迫った。現実には存在する鉄道を舞台にした連作推理小説である以上、鉄道に関する資料収集は欠かせないのだが、そのスタンスを確立させたのが本作だ。

この作品で私の予想以上に高い評価を得たのが食事シーンだ。食堂車『ダイナープレイデス』での食事シーンは剣と確氷の関係を恋愛という新たなステージに引き上げる舞台として有効だと判断し、また自分の中でも全力で描きたい思い出であることから気合を入れて書いたのだが、批評会ではミステリパートそっちのけでこの食事シーンを取り上げる方もいた。嬉しい反面、本業は推理小説であるため少し複雑でもあった。ここから私は連載と別枠にグルメ作品も不定期で執筆、掲載するようになったため、『黄昏に死す』は自分が考えもしなかった方面での才能を教えてくれた恩人のような作品でもある。

作中の割と序盤で山口百恵『いい日旅立ち』の歌詞を挿入しているが、これは実際に『トワイライトエクスプレス』の車内放送BGMがこの曲だったことに由来する。それに、作品のテーマにもぴったりの曲だったのだ。ただ、第五話で明らかになる確氷の父親の伏線として用いるべく、引用する歌詞の位置を二番のラストにしてもよかつたかもしれない、と今更ながら思わなくもない。

さて、推理についてであるが、この作品はいささか失敗した面が否めない。トリックについては特に不満は無いのだが、作者の書き方や態度から犯人を予想できてしまったという作者が続出したのだ。これは推理小説としては大きな欠陥であると考えているが、連載全体を通じ

た傾向でもあり、私が推理小説を執筆する上での最大の弱点が露呈した瞬間でもあった。

列車内で発見されたのは頭部と両手が無い死体。これは旧作で作りに出したトリックを若干アレンジした上で流用したのだが、なんと執筆途中に類似したトリックを使った商業作品を見つけてしまった。綾辻行人『奇面館の殺人』（講談社文庫）だ。かの名作『十角館の殺人』から続く『館シリーズ』の最新作だが、この作品に出てくる死体の状況と似ているのだ。まさかと思つて読んでみると、果たして似たような理由による似たようなトリックだった。

完全に一緒だったわけではないし、決してパクリではないため連載に踏み切つたのだが、どうか将来の読者の皆様には『黄昏に死す』よりも前に『奇面館の殺人』を読んでいただきたい。一つだけフォローさせて頂くと、現役の大御所推理作家と類似したトリックを自力で組むことができたことは自信になった。

時刻表トリックについてもオリジナルであるものの、芋粥先生より島田荘司『御手洗潔の挨拶』（講談社文庫）に収録されている『数字錠』と発想が似ていると指摘された。この作品もおすすめであり、併せて読んでいただければと思う。

事件の犯人の一人である白雪春江は、釜田の元妻だ。旧作ではこの白雪が殺害されて釜田が疑われるという筋書きだったが、連載に持ち込むにはあまりにも粗の多いトリックであったために設定を破棄。旧作の中でも別の寝台列車で起きた殺人事件のトリックに新規作成した時刻表トリックを組み合わせて本作にした。旧作では殺害され、連載では殺人犯になる白雪……つくづく損な役回りだ。ちなみに、白雪は特急『しらゆき』（新潟〜上越妙

高・新井）から命名した。

また、この作品はフィクションとノンフィクションの狭間で揺れ動く経験を初めてした作品でもある。通常、車内で変死体が発見されると列車は問答無用で運転打ち切りとなる。しかし、私はどうしても札幌までの旅を再現したかった。過去に『トワイライトエクスプレス』での事件を描いた推理小説に西村京太郎『豪華特急トワイライト殺人事件』（新潮文庫）、吉村達也『トワイライトエクスプレスの惨劇』（徳間文庫）などがあるが、いずれも途中で運転打ち切りとなっている。私にはそれが少し不満だった。それに、組み上げた時刻表トリックの都合上、『トワイライトエクスプレス』には時間通りに札幌まで走ってもらわないといけない都合もあった。そのためこの作品はフィクション的な面白さを優先し、列車を札幌まで走らせることにした。

確氷の過去についてもトラウマというかたちで表出している。確氷の過去については連載においてどれくらいのペースで出していけばいいのかわからず、考えた結果どの作品でも少し露骨に描写することにした。『旅する女』を一気読みするならともかく、季刊の三文文集に掲載していくため、読者が前回の話をどれくらい覚えていくかわからない。忘れ去られることのないように、また忘れられても思い出しやすいように、真相を明かさないう程度に露骨に描写することにした。結果的にこの方針は読者に確氷の過去を想像させるいい材料になり、連載への興味を持続させる効果をもたらした。

連載の陰で暗躍し、第六話以降に正体を現す筈原についてだが、実はこの作品には関わっているものの記述はしていない。当初予定ではこの作品とは無関係の存在にするつもりだったのだが、出版後に予定を変更したため

に後出して関わることになった。連載は一度出してしまった作品設定を変更できないため、長期的スパンで考えるのが大変なのだ。最終回とかは目の前の結末にまつすぐ突き進めばいいためあまり心配いらぬのだが、微妙に過去作からの制約を受けつつも先が長い中盤辺りがしんどかったりする。

碓氷と劔の恋愛模様については割とハイテンポで進める必要があると判断し、次回作でカップル成立を狙うことにした。碓氷の過去を救うには劔との成就が必須であると当時から考えており、そのために必要なプロセスを逆算してみると両片想いや返事の保留で読者を焦らす、といったテクニクを詰め込む暇は無かったのだ。この時の私は二年生のうちに連載を終えるつもりだったためにこのような計算をしていたが、色々あつてこの目論見は崩れてしまうことになる。

この作品の執筆期間は2019年5月頃から秋にかけて、約4か月くらいだっただろうか？ 序盤のランチタイムの辺りまでを少しずつタラタラと書き、そこから先は一気に筆が乗ったために仕上がりは早かった。

執筆の間に夏休みを挟んだのだが、私は色々あつて山形県の余目という町で桐方先生と合流してお昼を食べることになった。この時に余目駅で下車したのだが、駅舎では映画『おくりびと』のロケ地であることを喧伝していた。私が現実的に『トワイライトエクスプレス』に乗車した時なぜか車内で『おくりびと』が放映されていたのだが、奇妙な縁を感じたものだ。この小ネタも作中に反映している。

小ネタといえば、この作品の中でも警察関係者、及び乗務員の名前は高校時代の部活仲間の名前をもじってつけている。高校では英語部に入っていたのだが、大会の

遠征で水戸に行くことになった時にひよんなことから私の創作活動がばれてしまった。その結果、遠征の道中に読むからと新作を依頼されたのだ。執筆期間は2週間、遠征の準備も進めながらでの執筆であり死ぬような思いをした。この時に書いたのが第二話のもう一つの前身に当たる『カシオペアの死神』という中編だ。ここで英語部メンバーをモブキャラとして出した名残をこの作品でも受け継いでいる。

長編であり編集の負担も大きいと考え、早めの提出を心掛けた。これは連載において最終話前後編を除き一貫した私のスタイルとなった。編集会では他の文士による短編が多く並ぶ中、分厚い紙束となった私の作品にどうめき上がったのをよく覚えている。正直、誇らしさが9割、申し訳なきが1割といったところだった。編集作業は夜まで続き、その時に編集して下さったY君、夏樹先生、雨のひぐれ先生、遥弥生先生にはここで改めて感謝を申し上げる次第だ。

連載はここから佳境に入るが、どうも私は提出する原稿が軒並み長いという悪癖を有するようで、毎度のようにページ数や文字数を聞かれるようになる。毎度毎度答えるのも面倒（と言いつつ聞かれると嬉しい）なため、正確な記録を各話紹介の冒頭に記している。ただし、一部作品は原稿提出後に改稿・加筆修正を加えているため、実際に発行された文集の実態を反映していない場合がある。そこはご了承願いたい。

第三話 命懸けで疾走れ（2019年冬号掲載）

ページ数……56（改稿後）
文字数……92854（改稿後）

この作品を一言で評するなら「問題作」だ。碓氷と劔の関係については順当に進めたのだが、問題はトリック……というか、事件の内容そのものだ。

事件のあらずじは、劔が運転する最終の新幹線が爆弾魔に乗っ取られ、指定された時間までに東京に着くべく全力で列車を走らせるといふもの。最後は碓氷が劔を救出し、そして謎解きを経て大団円を迎える。

この連載では鉄道ミステリを中心に取り上げようと決めていたのだが、どれも似たような事件では読者も飽きてしまう。それに、これは第三話。起承転結では転に当たる部分（ただし転じてから結までがまだまだ長い）で、従来の作品とは一線を画した動きの大きい作品にしたかった。だからこそ、本格ミステリとはやや距離をおいたサスペンションじみた列車強奪を描くことにした。

実はこの作品、私が中学高校時代に初めて書いた作品つまり劔や霧島が初めて文字になった作品を元ネタにしている。当時の私は映画『新幹線大爆破』を観て感銘を受け、それを元ネタに初めて推理小説を書いたのだ。タイトルは『制限速度』。尻の青いひよっこ（今でもだが）が書いた作品であるために、今読み返すとツツコミが追いつかないような作品だが、私の原点であるという点では間違いない。この第三話はそういう意味では原点回帰とも言えるだろう。

『制限速度』は私の宝ではあるものの、読むに堪えな

い作品であった。それは高校時代の私も認識しており、リニユーアルを兼ねて『最高速度』に改題の上書き直した。この作品では私のルーツともいえる高知と秋田の間で時刻表トリックを組もうとしたものの組めず、それを逆手に取った作品にした。しかし、これもまた出来栄えは悪く、書き上げた後もどうしたものかと頭の片隅で考えていた。高知と秋田、という立地関係は連載最終回で結実することになるのだが、それについては最終話の項で語ろう。

時は流れ、大学に入る直前の春休み。一年間浪人して執筆から遠ざかっていたのだが、その反動もあって私は爆発的な勢いで執筆をしていた。この時に生み出されたのがこの第三話の直接的な前身に当たり、旧作最後の作品となる。タイトルは『命懸けの疾走』『制限速度』『最高速度』の流れをくむ作品であり、第三話の時刻表トリックはこの時に生み出されたものを流用したものだ。基本的な筋書きも第三話とほぼ変わらなかった。

ここで、時刻表トリックの条件、そしてこの作品が問題作である所以をお教えしよう。

時刻表トリックには二つ前提条件があると考えている。一つは、列車などの交通機関が時刻表通りに動くこと。つまりダイヤ乱れや遅延、運休などは基本的に起きない前提でトリックを組む。有栖川有栖『ジュリエットの悲鳴』（角川文庫）に収録されている『夜汽車は走る』といったような例外的な作品はあるものの、ほとんどの時刻表ミステリでは公共交通機関は正確に動いている。

もう一つは、時刻表に掲載されている情報でトリックが完結すること。例えば、通常の時刻表には貨物列車の時刻は掲載されていない。貨物列車を使った時刻表トリックを組むのであれば、旅客列車とは別枠で貨物時刻表

から時刻を引用し、読者に提示する必要がある。列車が時間通りに走るといふ条件が前提になるのはよく分かる。第一話、第二話でもその条件でトリックを組んだ。しかし、と当時の私は思ったのだ。……現実問題、そんなにうまく事が運ぶのだろうか？

そう、私は前述の条件を崩した時刻表トリックを描いてみたいと考えるようになったのだ。だが、悪天候や人身事故といったものが原因のダイヤ乱れでは、どれくらい遅れが増大するか分からない。これでは犯人もトリックを組みようがない。では、どうするか？ 私の思考は一度ここで行き詰まることになる。

この第三話は2013年に起きた事件という設定だ。刃が運転するのは秋田新幹線「こまち」。当時は「こまち」用車両の世代交代の時期に当たり、工場で製造された新車が秋田に続々と運び込まれている頃だった。その新車は一部が貨物列車として秋田に運び込まれる。

これで何かトリックを組めないか、と考えた。そこで時刻表をひっくり返して調べまくった結果、惜しいところでトリックが組めないと判明した。最終の『こまち』の時間があと30分くらい早ければトリックを組めたのだが……。

この時、行き詰まっていた思考が蘇った。ダイヤ乱れによるトリックをどう可能にするか？ 通常の時刻では組めないトリックをどう成立させるか？

私はここで、斜め上の回答を導き出した。ダイヤ乱れといっても遅れではなく早着にすればいいのだ。しかし、鉄道で早着というのはほとんど例が無い。ましてや数十分単位での早着など現代日本ではまずありえない。ではどうするか？ 何のことはない、無理矢理急いで走らせ

ればいいのだ。こうして、『こまち』を暴走特急に仕立て上げる方針が固まった。

こうして、作者が専用に鉄道ダイヤを作り直すという前代未聞の時刻表ミステリが幕を開けた。連載の基本的な舞台を秋田にしたのも、この時刻表トリックを無理なく実現させ、刃を無理なく巻き込むためだ。日本に時刻表ミステリは数あれど、ここまで大胆なことをしている作品にお目にかかったことは今のところない。あるなら誰か教えてください。

書き上げてみると、私個人としてはとても面白い作品に仕上がった。しかし、それを三文に出すとなれば全く別の話だ。既に触れたとおり、三文のメンバーは鉄道はおろか推理小説に明るくない人が多い。しかしこの作品では鉄道の専門用語や知識がバンバン飛び交いながら進む。初心者にも易しく、それでいて専門的に書き上げる。ところが第三話には求められた。

どの作品でも資料収集は行っているのが通例だが、この作品に関しては特に力を入れた。第二話以上に、そして連載で一番情報収集に努めたと断言できる。何せ、列車を早着させるとなれば現実に即しつつ、自力でダイヤを設定するに等しいからだ。どのタイミングでどれだけ速度を上げるのか、駅の通過による時間短縮はどれくらいなのか、時刻表と電卓、過去の高速走行試験結果などを突き合わせる日々が続いた。後に取材も兼ねて東北新幹線に乗車するなど、気合十分だった。

三文に出すに際して、もう一つの課題があった。読者の興味をいかに引き付けるか、というものだ。ずっと鉄道描写ばかりでは読者がぼてしてしまうのは火を見るより明らかで、どこかで気分転換がてら読者にも親しみやすいシーンを挟む必要があった。

この時に活躍したのが居酒屋『かま田』のメンバーだ。確氷と劔の関係も早めに進めないといけない中、釜田と大和に確氷のサポート役として狂言回しの役割を担わせ、確氷をもう一人の主人公にすることにした。元々、確氷を東京に呼び寄せる予定は無かった。しかし、確氷はどうしても東京に行くと言って聞かず、作者の意に反して東京駅で犯人相手に女子力（物理）を爆裂させることになる。確氷の心情描写は読者を引き付ける役割と同時に著休めの役目を担うことになった。

確氷はこの作品を皮切りに徐々に人間性が前向きな方向へ変化していくことになる。この方向性を打ち出す助言は遙先生から頂いた。氏は「涙が人を強くするのではなく、涙を拭くことで人は強くなる」とツイッターの質問箱か何かで語っており、そこから着想を得たのだ。この連載で確氷は何度も涙を流し、しばらくは劔の手で、そして最後には自分の手でその涙を拭うことになる。

劔は霧島と組ませることにした。劔は運転士として犯人に対峙し、霧島はシステム面などで劔をサポートする。そして東京駅で集結する、といった筋書きになった。

霧島は地上でJ・Rの職員や警察と共に奮戦するため見せ場はあるのだが、劔の見せ場には地味に苦労した。列車を運転させられるために当然ではあるのだが、事件に巻き込まれ脱出できない被害者だ。犯人との対峙、やり取り、交渉などで頑張っただけの見せ場を作ったものの、彼の持ち味である推理については終盤でしか見せ場を作ることができなかった。トレインジャックという緊迫が続く作品において、時刻表トリックを見破る伏線を劔に読み取らせることはほぼ不可能だったのだ。彼は命懸けの運転で精一杯であり、当時の私の力量では下手に伏線を張り込むと緊迫感が削がれてしまう。

東京駅でのシーンにはトリックと同じくらい、いやそれ以上に心血を注いだ。確氷は何としても犯人を殴り飛ばすと言って聞かない。作者としても彼女の要望を叶え、最大の見せ場とするために神経を使った。私はアクションを書いたことがほとんどなく、東京駅でのシーンは手探りでの執筆となった。取材も兼ねて何度も東京駅の丸の内駅舎北口に出向いた。当初は立地的に南口にするつもりだったのだが、列車の停車位置などを勘案して土壇場で北口に変更した。

アクションシーンで意識したのは、映像になった場合には威勢よく主題歌が流れるような勢いのあるシーンにしようというものだ。もはやバトルものの様相を呈しつつあったが、この甲斐あつて作者渾身のシーンに仕上げることができた。連載全体を通して一番思い出深い場面だ。そういえば、この作品で初めてレギュラーメンバー5人が一つの作品に出演したことになる。

主題歌の話が出たため、ここでこの連載のモチーフとなった曲を紹介したい。いくつかあるのだが、一番を挙げるなら2007年にリリースされた水樹奈々のアルバム『GREAT ACTIVITY』に収録されている『Chronicle of life』という曲が該当する。一部の音楽配信サービスで提供されているため是非探してみしてほしい。作者としては、歌詞が確氷の未来や生き様を暗示しているように思えないからなのだ。

かくして第三話はサスペンスありアクションありと今までの作品とはかなり様相を異にした仕上がりとなった。ただ、トリックが時刻表ミステリの中でも奇想天外な部類に入ることや動機の書き込みが甘いことなど、連載の中で一番傷が多い作品でもある。あくまでもミステリであるため、アクションの後に山場として謎解きを持って

きたのだが、相手は連載の中でも屈指の難易度（と変態度）を誇るトリックだ。作品構造の核である疾走感とタッチしないこともあり、読者からの評判はあまり良くなかった。

どうせならもっとでかい動機を用意し、巨悪の利権絡みの話にしてもよかったかもしれない。犯行のスケールと動機のスケールが釣り合っていないという点ではいささか残念な作品とも言える。連載は今読み返すと書き直したい部分が散見されるが、作品を丸ごと書き直したいと思うのはこの第三話と後述する第六話くらいだ。

初稿は大学入学直前に出来上がっていたが、それを元手に連載用にリメイクした。ベースになる作品が出来上がっていたために執筆も分量のわりにそこまで苦労せず、第二話完成時点では既に半分くらい書き上げていた。そのまま第二話と同時に提出することも考えたのだが、さすがに全体的にもう少し肉付けしたいと考えて冬号に回すことにした。冬号までにスケールが倍増したことを考えると、この判断は間違いではなかっただろう。

ページ数……15（改稿後）
文字数……20026（改稿後）

第一話以来となる短編だ。といっても、三文の中では比較的長編の部類に属するだろう。ページ数や文字数を見て短編だと思つたそのあなた、毒されていますよ。

内容は居酒屋『かま田』での安楽椅子もの。大和の居酒屋での働きっぷりを読者に初めて披露した作品だ。通常、各作品ごとに数日から数か月の空白があるのだが、この作品は次の第五話と時間がほぼ連続している。これは確氷の過去を徐々に明らかにしていくための仕様だ。

この作品はありがたいことに、連載の中で一番トリックが好評だった作品だ。私の中でも、時刻表ミステリとは別に鉄道ミステリとしては会心の出来だと思つている。芋粥先生が指摘してくれたのだが、鉄道をトリックに使う犯人には共通した疑義がある。普通はそこまで鉄道に詳しくないのではないかと。それは私も思うところだ、この作品と最終話ではその疑義に向き合った作品とした。第四話では鉄道に詳しくないが故に犯人が犯したミスからトリックを暴き、最終話では鉄道に詳しいからこそ使えたトリックを用意した。

芋粥先生は元々ミス研の人間で、三文の中でも私以上に推理小説への造詣が深い。私の信頼できるよき友であり、一緒に神田神保町の古本祭に行ったこともある。第二話や最終話で使う資料や時刻表はこの古本祭で購入したもので、芋粥先生の誘いが無ければこの連載は違ったものかたちになつていたに違いない。この作品について彼から直々に激賞のLINEを受け取ることができた時には、

飛び上がりそうになるほど嬉しかった。

鉄道に詳しくない、というのは読者一般に当てはまる。そのために私はこの連載において、鉄道知識の平易な説明を作品に組み込むことを絶対条件とした。そうしないと伏線として機能しないためだ。鉄オタだからこそ、普段から使う鉄道でも微妙な差異を把握することができる。一般人には分からないし、一般人にとつてはどうでもいいような違いで喜ぶような人種だからこそ、そんな些細なポイントから瓦解する鉄道トリックを描くことができる。それは私の一種の理想とも言える。時刻表ミステリとはまた違った方向性になるものの、この第四話は純粹に鉄道推理小説として私の理想形に近い。

しかし、このような推理小説は執筆が困難だ。1、2時間も時刻表とにらめっこすれば概形が掴める時刻表トリックとは違い、そもそもトリックを思いつきにくい。思いついても、鉄道に詳しくない一般読者に平易かつ自然に作中で説明を入れないといけない。

読者から時々、どうやってトリックを思いつくのかを聞かれることがある。私が知りたいくらいだ。トリックは突然ポイントと思いつくものではない。普段から色々なものを観察し、日頃から考えるしかないのだ。それだ。ようやくネタらしきが浮かんだと思つても、書き進めるうちに破綻したり没にしたりすることもある。そのまま使えることはまずない。書き進めるうちにどこかで修正や妥協を迫られる。自分の才能の無さを呪いながら、頭をかきむしりながら必死に知恵を絞る。そうして初めてトリックを完成させることができるのだ。少なくとも私の場合はそうだった。

話を連載に戻そう。久々の居酒屋ものとあつて、料理にも割と力を割いた。裏設定になるが、この店の名物は

芋料理、魚料理、梅チャーハンだ。完全に作者の好みで設定している。

終盤の謎解きは剣と確氷が一对一で酒を傾けながら会話するのだが、今になって読み返すと旧作の雰囲気が出ている。連載では確氷は居酒屋店員として働いているため、旧作で描くことが多かった剣とつぼり酒を片手に推理を聞くといったムーヴをかますことができなかったのだ。

実はこの作品、当初は執筆予定が無かった。第三話が終わった次はこの連載で第五話に当たる作品を掲載するつもりだったのだが、いささか展開が拙速なように感じられてこの話を追加することにした。割と急造仕様だっただけに、批評会で好評を博したのは意外だった。ちなみに第五話は2019年の11月頃には概ね書き上げていた（ただし推敲でかなり苦労することになる）。……今思うと、当時から私はとんでもないペースで執筆していたようだ。

しかしこの作品にも欠点はある。よりにもよって好評を博したトリックに欠陥が見つかったのだ。この作品では新幹線の座席が回転しないことが鍵を握るのだが、書き上げてから1年以上経つたある日、トリックに使った新幹線の特集番組を観ていたら、回転しないと思っていた座席が普通に回転していたのだ。私は卒倒しそうになった。現実を間借りした作品である以上、これではトリックが成立しない。しかし、今更出してしまった作品に手を加えることはできないため、いつか機会があつたら書き直したいところだ。

本作を書き上げた時期は失念してしまつたが、この作品を書いていた頃から私の連載、それ以上に三文がある困難に直面していた。新型コロナウイルスの感染拡大だ。

中国の方で新型コロナウイルスの感染拡大が連日報道されるようになった頃、私は2月の頭に大学での試験などを全て終えて実家に帰省した。当時の私は春休みが終わったまま上京するつもりで、少しの間執筆をお休みして羽を伸ばそうと考えていた。第四話も構想はできているし、第五話は推敲を終えたらいつでも脱稿できる。新入生歓迎号に掲載するとなれば話は別だが、さすがに新歓に連載途中の作品を持つてくるのは遙先生から止められたため、どのみち連載は春以降の再開になる。そう考えて、時刻表や鉄道資料一式を東京の寮に置いて高知に帰省してしまっただのだ。

しかし、だ。ご存じの通り日本でも新型コロナウイルスが確認されるようになり、大学の再開は延期された。猛威は止まらず、結局2020年の大学運営はオンラインが基本となった。とても上京などできるはずもなく、私は手元に使える時刻表を一冊も持たない状態になってしまったのだ。

三文の活動にもコロナは影を落とし、年4回発行する文集は春号の発行を見送ることになった。三文としても苦渋の決断であり、春夏合併号として出版することになるのだが、この発行見送りの決定は私に時間的猶予をくれた。通常通り春号を発行していたら、手元に時刻表が無いことを理由に休載していただろう。

しばらく待てば上京できるだろうと考えて、私はしばらく第四話と第五話を脇に置いて第六話の執筆を行うことにした。第六話の詳細は後述するが、鉄道が絡まないミステリのために手元に時刻表が無くても執筆できたのだ。しかし、いつまでたっても上京できる様子は無く、業を煮やした私は通販で必要な時刻表を取り寄せて急場をしのぐことにした。ようやく第四話と第五話を書き上

げることができ、どうにか春夏合併号に同時掲載することができた。

結局、私は2021年4月まで上京できなかった。寮は秋に引き払ったが、荷造りは全て引越し業者に丸投げした。私は3年になるまで高知で大学生活を送ることになったのだ。これは誰が悪いわけでもなく、よって誰かを非難したい気持ちは毛頭ない。一つだけ確実に言えることは、私の連載は、そして三文の最大の活動である執筆と出版はコロナごときでとまるものではなかった。私は三文の底力を見せつけられ、また自身も三文の底力の一部となったのだ。

第五話 るくでなしの遺産(2020年春夏合併号掲載)

ページ数……13(改稿後)
文字数……18983(改稿後)

第四話と同時に掲載した短編だ。コロナが無ければ春号に第四話、夏号に第五話と掲載することになっていただろう。春夏合併号なのをいいことに、春号用と夏号用の作品をまとめて掲載するという荒業に打って出た。なお、後に同様の荒業を第七話と第八話でやらかすことになる。歴史は繰り返す。

確氷の過去編パート1だ。彼女の生い立ちが明かされるが、まだ確氷の過去全てが判明するわけではない。

時系列としては第四話の直後になる。今になって思い返すと、第四話との切り位置をもう少し考えてもよかったかもしれない。剣と確氷がラブホに入り、あれやこれや始めようとするシーンから始まるのだが、生憎私はラブホに行ったことも、そこで恋人とナニしたこともない。経験が無い中、少し色気があることもあり、地味に書きにくいシーンだった。下手に書くといやらしくなってしまう。そのいやらしさを前面に押し出し読者にあえて嫌悪感を抱かせる手法も考えたのだが、少なくともそれはこの話で展開するものではないと判断した。

この作品は連載において絶対に組み込まなければならぬ話だ。なぜか。それは、この第五話の構造と連載全体の構造が類似しているためだ。読者に連載全体の構造を、そして確氷の正体を暗示する伏線の役割を持たせているためだ。

確氷は過去に殺人を犯した。その確氷を主役に据え、確氷の目線を中心に連載を行う以上は、語り手が犯人な

ケースもある、ということ連載のどこかで明示するとは必須だった。ちなみに、犯人目線で描かれる推理小説は叙述トリック、倒叙物と呼ばれることがある。

連載全体を倒叙物として扱う以上、どこかで倒叙物の作品を挟む必要があると判断し、それをこの第五話にした。この作品にしたのは、レギュラーメンバーが刃と確氷しか出てこないこと、そしてトリックの都合だ。

この作品において犯人目線で物語を紡ぐのは確氷の父親、確氷新平。彼はかつて弟を殺してしまい、即席で時刻表トリックを組んで罪から逃れようとする。しかし運の悪いことに、警察が間違った推理で確氷父を犯人と指摘してしまう。本当のことを明かすこともできないため反論もできず、そのまま逮捕されてしまう。

警察が間違った推理で逮捕するも、犯人はそれに反論できないというあまり類型の無い推理小説だ。この作品を事件を解く側から描いたらどうなるか。犯人が本当に使ったトリックが明かされずに終わるとい何ともマヌケなことになるのだ。だから、このトリックは犯人目線で描くことが必須だった。

三文に倒叙物の作品を出すのはこれが二度目だ。三文に入って最初の作品である『遺された仕事』も倒叙物だった。倒叙物のアリバイ短編の名手であり、私が最も尊敬する推理小説作家である鮎川哲也の真似をしたくなつたのだろう。この第五話ではそのリベンジを兼ねたとも言えるかもしれない。

この事件は2004年3月のJRダイヤ改正の日に起きたもの、としている。確氷はダイヤ改正前の時刻表でアリバイトリックを組み、警察はダイヤ改正後の事故億票でアリバイを崩した。このトリックを組むにあたって、ダイヤ改正前の時刻表を提供してくれたのが葉桜先生だ

った。彼が譲渡してくれた時刻表が無かったら、この作品を書くことはできなかった。この連載は決して私一人で書き上げたのではない。三文が書き上げたのだ。

ダイヤ改正後の時刻表は当初は鉄研から借りようかと思ひ、実際に借りて書き上げた。しかし鉄研の方に許諾を取るのが面倒だった中、芋粥先生に誘われて行った神田神保町の古本祭でうまい具合にお目当ての時刻表を発掘した。

この作品では芋粥先生に助言を頂いた。犯人は鹿兒島の人間なのだが、芋粥先生も鹿兒島に縁深い方だ。第五話の舞台が鹿兒島と熊本であることを告げ、様々なレクチャーを受けたのだが、あまり反映できなかったことが少し心残りだ。なお、舞台をこの地域にしたのもトリックを優先した副次的なものだ。確氷の年齢的に使えそうな状況がダイヤ改正前後で発生するタイミングが2004年の熊本・鹿兒島しか無かったのだ。

この作品での失敗を挙げるとすれば、タイトルだろう。当初、この作品は確氷の父親とその弟が互いの財産を巡って争い、そして殺人に発展させる筋書きにするつもりだった。しかし書き進めるうちに財産争いというテーマが邪魔になってきたのだ。しかし完全に作品から撤去することもせず、タイトルや作品方向性を改めることもしなかった。ひとえに作者の怠慢が生み出した失敗だ。

旧作でも確氷の父親は浮気相手である会津と子供を作り、それが確氷なのだが、その後の展開が異なる。旧作では確氷の父親と会津が互いを殺害しようとしたものの偶然に偶然が重なり相打ちとなり、巻き添えで確氷の義理の母も死んでしまい、確氷が天涯孤独になるという話だった。トリックに無理があつたため没設定とし、連載では会津は行方不明、義理の母親は病死したという設定

にした。

会津は作者としても処理に困り、ついに書かないことで逃げを打ったキャラクターだ。どうにかして会津も連載に引つ張り出し、確氷と対峙する話を描いてみたいとも考えたのだが、さすがにそこまで考える余裕は無かつた。少し悔いが残るキャラクターだ。いや、どのキャラクターにも描き切れなかつた表情があり、悔いは残るのだが。

刃と確氷の関係は恋人同士のまま。こう書くと停滞しているように見えるが、その中でも刃は着々と確氷の過去に迫り、手掛かりを得ていくのだ。ラブホでの場面を描いたのも、確氷の体の傷を描くためであり、サービシーンという目的はあまり大きくない。全くないとは言わないが。

連載はこの第五話で折り返し地点を迎える。ここから展開は量的にも、そして内容的にもハードになり、作者を苦しめていくことになる。

連載の中でも一番の異色作であり、そして一番書くのがしんどかった作品だ。

この連載は基本的に鉄道ミステリを中心に取り上げている。その理由は簡単で、作者が鉄オタで鉄道絡みのトリックが一番作りやすいためだ。しかしこの第六話は連載で唯一鉄道が一切出てこない。ジャンルとしてはクロードサークル、俗に雪山山荘ものと呼ばれるものに属する。

雪山山荘ものとは何か？ 簡単に言うと、探偵と容疑者たちが脱出不可能な状況下に追い込まれ、そこで殺人が発生するというものだ。警察の科学捜査が介入できず、探偵と犯人の一騎打ちができるというメリットがある。閉じ込められる、というのは吹雪の山荘や孤島の嵐などが多い。

古くから世界中で愛されてきた本格推理小説のスタイルの一つで、アガサ・クリステイ『そして誰もいなくなった』や『オリエント急行の殺人』、有栖川有栖の『江神二郎シリーズ』、綾辻行人の『館シリーズ』はこのスタイルの代表的傑作だ。今村昌弘『屍人荘の殺人』（東京創元社）は異端な設定と緻密な推理により大ヒットを記録したクロードサークルものだ。アリバイものに目が無い私であるが、こういった雪山山荘ものも大好物だ。いつか書いてみたいと考えるのも無理からぬ話だろう。

この作品には旧作が二つ存在する。一つは『青い流れ星』という原稿用紙にして40枚くらいの中編で、霧島

のワンマンショーだった。実験的に剣以外を探偵役に据えようとして、個人的にはそこそこ成功を収めたのだが、まだこの時点では警察も介入しており、雪山山荘ものではなかった。

その後、全くの別作品として『飛雲荘の落日』という作品を制作。第六話の直接的なモデルになった作品で、剣や確氷、居酒屋メンバーが活躍する。現役での大学受験を終えた春休みに書いた作品だ。

この作品はある点で特徴的だった。高校時代の私の友人二人、おいらせ氏とAzuma氏も創作をしていた（ただし私のように文字起こしをするのではなく、一人はイラスト、もう一人はそもそも媒体化していない）のだが、私からコラボを持ちかけたのだ。このコラボ関係を第六話では維持している。

『飛雲荘の落日』は浪人後に『飛雲荘で眠れ』と改題の上で推敲を行った。ちょうど『命懸けの疾走』の初稿を書き上げる直前のことだ。手元に原稿が残っているために読み返したが、剣と確氷が結婚前に出くわした事件として描こうとしていたみたいだ。旧作末期から連載にかけての過渡期を象徴する作品になっていた。推敲したのは初稿が不完全燃焼な感じがしたためであったが、推敲してもどうもしっくりこない。時と場合によっては没原稿にしたかもしれない。

コラボ先のキャラクターは私の都合で性格や行動を改変することができず、それぞれのキャラクター性を生かした創作が求められた。しかも舞台は書き慣れた鉄道ミステリではなく、ほとんど書いた経験が無い雪山山荘もの。書き始める前から難航することは必至だった。元々の原稿があまり納得できない出来だったこともあり、この作品を連載向けにリライトすることには抵抗があった。

しかし、クロードサークルという誘惑に抗しきれなかった。

当初は旧作『飛雲荘の落日』のトリックだけを使い回そうかと考えたのだが、せっかくなら花形の連続殺人にしたい。『青い流れ星』からもトリックを流用することにした（結果、『青い流れ星』で主役を担った霧島は一転してお役御免になった。許せ。さらに別枠で毒殺トリックを思いついたが、これは没にした。詳細は語らないものの、もう片方のトリックをそのまま描いたら18禁の作品になってしまうためだ。一応この作品は全年齢向けである上、作者のメンタルが18禁展開に耐えられるほど凶太くない。このトリックを巡り剣と確氷が大喧嘩する展開もかなり検討したのだが、收拾がつかなくなりそうなことと、そろそろ剣と確氷の関係を恋愛よりも高い段階に引き上げる頃合いに差し掛かっていたことから没案にした。

帰省してから執筆に取り掛かったが、間に新歓号向けのSF読み切り、時刻表を入手してからは連載の第四話や第五話、グルメ作品などを執筆していたために執筆のペースは遅かった。いつものように前半だけちよろちよろと書いて、中盤以降を一気に一気に書き上げるといったパターンだったのだが、筆が乗る時は1日に5000字、全く気分が乗らない時には200〜300字しか進まない時もあった。しかしそれ以上に、この作品では書き上げてからの展開が苦しかった。

当初、この作品での被害者は二人の予定だった。館の主人を硫化水素ガスにより毒殺、犯人の共犯者であった主人の秘書を凍死させるだけのつもりだった。前者のトリックは『青い流れ星』から、後者のトリックは『飛雲荘の落日』からの流用だ。このトリックを再現するのは

さすがに列車上では不可能なため、館ものにした。

しかし、書き進めるうちに作者にもペース配分が掴めなくなってきたのだ。死体が複数登場する作品は連載でも第二話と第四話で書いたが、前者は犯人が複数、後者は片方が予期せぬ誤認殺人だった。当初から計画的に連続殺人を書くのはこの第六話が初の経験だったのだ。コラボキヤラに気を配らなくてはならないことも災いした。私一人では考えることが多すぎて、段々と脳内とネタ帳の中で伏線やトリックや描きたいものが混線し始めたのだ。

這う這うの体で書き上げたものを読み返すと、やはりしっくりこない。原因を突き止めるのに2週間くらいかかった。何度も読み返すうちにふと、あることに思い至ったのだ。回収しきれない伏線が多いのだ。

伏線は張るタイミングと回収するタイミングを計算しながら書き入れる。同じ伏線を何度も張り、まとめて回収することだってよくある。回収するタイミングはその多くが謎解きシーンだが、連載第六話の初稿の謎解きシーンでは回収されていない伏線が多い。執筆の都合上、推理や展開の自由度を上げるために伏線を多めに張り、回収しないで放置するというケースは無くはない。しかし、どうせなら根こそぎ回収したい。

そんな感じのことをぼんやり考えていると、ふと、あるアイデアが浮かんだ。死体を増やせばいいのではないか？ そうすれば、余剰になった伏線も多少アレンジすれば丸く収まる。被害者を増やしてうまく収めるというのも変な話だが、こうして私は急遽死体をもう一つ増やすことにした。

死体を増やすとなればそれだけトリックを増やす必要があり、それに合わせて必要な伏線を張り直すことが求

められる。また、死んでしまったキャラクターの動きやセリフ、役割を他のキャラクターに担わせる必要がある。修正は広範かつ細部に渡り、大変だった。館の人間は5人いるのだが、そのうち3人が殺害されるという展開になり、思い切って最後は皆殺しにすることにした。犯人が自殺、唯一の生き残りもそれに巻き込まれて死亡、拳銃の果てに館が全焼するという救いの無い結末にした。書き上げてみると、初稿と比較してずつと収まりが良くなった。

刃と碓氷の関係は割と甘めに描いた。これは最後の最後で碓氷が笠原に襲われるシーンとの落差を出すことと、刃が結婚という次のステージを見据えていることを暗示させることを狙った。不穏な終わり方をするのが決まっていたことも、作者の執筆に対するモチベーションを下げたのだが、連載という義務感で乗り切った。

私はハッピーエンドの作品が好きで、救いの無い作品はあまり性に合わない。救いが無いのは現実だけでたくさんだと思っているためだ。しかし、ずつとハッピーエンドなままで連載を続けるのでは碓氷の過去設定が無意味になるし、連載全体に上下運動が発生しない。必要だとは分かかって書いているのだが、碓氷が傷付いていく様子をここから第八話にかけて描いていくのは、正直辛かった。

めちゃめちゃ苦勞した末に77ページという当時の私としては過去最大の作品になった。文字数も10万の大体を突破した初の作品になった。今までの長編である第二話、第三話は10万の寸前で書き上げていたのだ。明大祭に向けて目玉作品になるだろうと意気込んで提出したのだが、その先に待っていたのは想定外の展開だった。

2020年の明大祭は新型コロナウイルス感染拡大の

影響により、全面オンラインでの開催となった。それ自体はいいのだが、問題は三文のブースだ。バーチャル空間上に和泉キャンパスを再現し、サークルを部屋ごとに割り当てるといったものだ。私の手持ちのスマホではデータが重すぎて参加できず、中根先生から見せてもらったバーチャル三文文士会の画像に私は愕然とした。教室内の壁にページの一枚一枚が磔にされていたのだ。この文章のように三段組の文章が画像としてそのまま、だ。これで作品が読めるはずがない。短編ならまだ根性で読めるかもしれないが、私が出したのは長編だ。過去最大の苦闘の成果をこのような扱いにされて、深い徒勞感を覚えた。これは誰が悪いというわけでもないし、コロナ禍の中でも頑張つて明大祭を開催してくれた実行委員会には敬意を表するのだが、少なくともバーチャル空間と三文文集の頒布が極めて相性が悪かったのは事実だろう。

その後、この作品は例によって三文の公式ホームページに掲載された。私はそこから全ての掲載作品をダウンロードするようにしているため、毎回自分の作品が掲載されていることも確認する。しかし、ここで私はひっくり返りそうになった。題名が『霧降荘の殺人』から『霜降荘の殺人』になっていたのだ（なお作品に霜降り肉は出していない）。三文の内部では笑い話になったが、タイトルが悪いという一部の文士からのコメントにはさすがに反論した。間違えやすいタイトルであることは百歩譲って認めたとして、実際の間違いを担当者ミスではなく作品のせいにされてはたまらない。ちなみに館の名前の由来は東武特急『きりふり』（浅草〜東武日光）だ。

とまあこのように、脱稿してからも色々悶着が絶え

なかった作品だったが、肝心の批評会での評価はちよつと微妙だった。コラボ作品特有の問題が浮上していたのだ。

この連載は一人称視点で描いている。今回のコラボでは、南風こまちのキャラクターから碓氷を、おいらせ氏のキャラクターから押鳥氏を、Azuma氏のキャラクターから榎原君を語り手に選定し、三人の視線をじゅんぐりに描いていくという方式を取った。これが裏目に出た。三人の出番をなるだけ平準化するために、多少無理のあるタイミングでも視点変更を行い、それが作品の面白さを削いでいたのだ。この作品を書き直すとしたら、恐らく碓氷を中心とした目線で執筆することになるだろう。

視点で思い出したのだが、旧作は基本的に三人称視点で描いていた。途中から一人称視点になったりしていたが、旧作と連載とを比較する上では大きな変更点と言える。

この作品で特筆すべきはもう一つある。連載の中で唯一、作品の枠を飛び出したのだ。

読者の皆様はTRPGというゲームを「ご存じだろうか?」 RPGゲームをテーブルトークで行うのだが、私は縁あって葉桜先生が主催するTRPGにお邪魔させてもらったことがある。これがめっぽう面白かったのだ。自分でもやってみたいと考え、思い切つてこの第六話をそのまま使つてTRPGのシナリオを作ったのだ。

推理小説を書く文士としていささかわがままな不安なのだが、読者は推理小説を読むときにどれくらい推理をしているのだろうか? ページをめくれば探偵が自動的に謎解きしてくれる。そのような中でトリックを見破ろうとする動機に欠ける読者も多いだろう。読者自身に

推理してもらうにはどうすればいいか? そう考えた結果、推理ゲームにしてしまおうと考えたこともこの作品をTRPG化した理由だ。もつとも、ただこの作品を丸々TRPGにしたのではネタバレになってしまうため、多少はネタバレを避けるべく設定の部分的な変更などを行った。

TRPGについてはずぶの素人であったために運営は拙かったが、幸いにも参加者からは概ね好評を得た。日程の都合で二回に分けて開催したが、いずれも参加者が剣よりも早く真相を見抜いてグッドエンドに辿り着いた。もつとも、葉桜先生が参戦した回は1クリを出されてシナリオ崩壊、GMが犯人を吐くという結末になったのだ。が……それもまた一興だろう。

第七話 巡る因果が果てる時(2020年秋冬合併号掲載)

ページ数……22(改稿後)

文字数……31846(改稿後)

碓氷の過去編パート2に入る。ここから第八話にかけて、碓氷の全貌が明らかになる。

第六話まで精力的に執筆を続けてきたものの、さすがに10万字超えの作品を出すのはしんどかった。第七話の執筆に至るまで約4か月に渡り、私は燃え尽き症候群になってしまった。第七話の展開が重くてなかなか書く気になれなかった、という側面もある。

燃え尽き症候群の私を引きずり起こしたのは年が明けたという事実と、メ切をそろそろ考えなければならぬという編集の都合だったように思える。とはいえ、この辺の記憶は曖昧であまり覚えていないのが正直なところだ。

この作品を読み返すたびに思うのは、もうちよつとタイトルをどうにかできなかったのか、という点だ。じっくりくる題名が思いつかず、結局仮タイトルのままで脱稿、提出したのだが、今になつてもこのタイトルは気に入らず、かといって納得できるタイトルは思いつかず、ずっと燻り続けている作品だ。

碓氷と剣のパート、居酒屋組のパートが明確に分かれている作品だ。碓氷と剣の様子だけを描くことも考えたのだが、それだけだと間が持たない。碓氷が襲われ、剣が襲われ、碓氷が逆襲するというだけでは作品としてつまらないと判断し、居酒屋組にも出番を用意することにした。

剣と碓氷が不在の居酒屋では、事件を持ち込まれた時
にどのように謎を解くのか？ それを描いてみたかった
というのも理由だ。この作品では第四話以来久々に霧島
が登場するほか、大和の姉である比叡が初登場する。比
叡は連載最終回で剣たちを事件に巻き込む要員として設
定し、その伏線として今回呼び出した。当初は釜田、大
和、霧島の三人で謎解きをさせるつもりだったのだが、
その計画に比叡も追加された。

普段は剣に謎解きをさせているため、それ以外のレギ
ュラーメンバーに謎解きをさせるのは新鮮で書いていて
楽しかった。最終回では霧島も碓氷と共に推理力を発揮
することになるのだが、結果的にはこの作品でその肩慣
らしができたとも言えるかもしれない。

居酒屋組が挑むのはやお馴染みの時刻表トリック。
今治と鹿児島、仙台を結ぶもので、短編の中では割と大
規模なトリックになる。

このトリックの途中で広島を通るのだが、広島にいた
水面先生に現地のフェリーに実際に乗ってもらい、トリ
ックの現場検証を行った。提供された写真やデータを検
討した結果、不可能ではないだろうという結論に至り、
執筆に至った。時刻表トリックは何度か書いたが、友人
に実証してもらったのはさすがにこれが初めてだ。

また、鹿児島を入れたのはトリックの都合によるもの
でもあるが、第五話で少し触れたとおり鹿児島に縁深い
芋粥先生へのリスペクトを込めた設定でもある。三作文
士にゆかりのある土地で事件を起こしたら面白そうだな
と思ったりもしたのだが、そうなるといくらトリックを
組んでも足りない。この思いつきは無かったことにした。
途中で瀬戸内の海流の速さなど、私も知らなかった事
実に翻弄されつつも、割とそつなく書き上げることがで

きた。この作品にはトリックの面では旧作やモデルは無
く、完全に書き下ろしだ。

トリックで不満があるとすれば、物証を突き付けられ
なかったことだ。証拠が無いと犯人に言い逃れの機会を
与えてしまうからこそ、探偵が証拠を突き付けるシー
ンはミステリでも盛り上がるシーンだ。しかし、これは安
楽椅子探偵ものであると同時に作者の力量不足の露呈な
のだが、この作品は既に終わった遠隔地の事件を警察の
話づてに解くものだ。犯人の証言の中から証拠を炙り出
すしかない。その炙り出せるような証拠が思いつかなか
ったのだ。結局、犯人を先に証言で自滅させ、その上で
時刻表トリックに挑むという書き方でお茶を濁した。

時刻表トリックは、犯行が可能であることを示しても、
そのトリックを使った証拠まではなかなか示してくれな
い。ここまで書いてようやく、私は時刻表トリックの難
しさに気付いたのだ。そしてこの難しさには最終話で苦
しめられることになる。

碓氷と剣についてはハードな展開になった。書いてい
て精神的に辛く、居酒屋組の推理パートがいい息抜きに
なった。特に、冒頭の碓氷が笠原から性犯罪を受けるシ
ーンは心を虚無にして描いていた。神経をどこに使った
かといえ、いかに18禁にならない程度に、読者に不
快感をもたらす描写にするかだった。批評会ではこの点
に触れる人はあまりおらず、読者にどのような効果をも
たらしたのかは分からない。

笠原は私がかかなり嫌うタイプの人間をモデルにして描
いている。特定のモデルはいない（ということにしてお
く）のだが、嫌悪する人間性を作品で出すのはやはり苦
痛だった。碓氷の視点から嫌悪感を出すのは簡単なのだ
が、そもそも近寄りたくないし目に入れたくない人物像

の再現として笠原を描いている。笠原に対する碓氷の嫌
悪は、作者のそれを鏡写しにしたものだ。

ただ逆に、憎いキャラクターだからこそ非道な行いを
遠慮なく書けるといふ側面があったことは否定できない。
碓氷の過去はあくまでも許されないものとして描くつも
りだったが、それでも読者には碓氷に同情的であってほ
しく、彼女の過去とのジレンマを立体的にもたらしたい
と考えていた。だからこそ、鬼畜人間として笠原を描
いた。

当初、碓氷には笠原の子を無理矢理妊娠させられ、そ
して卵管破裂による出血多量で命の危機が迫るといふも
つとハードな展開を考えていた。旧作がまさにそのよう
な展開だったのだが、今思うと私は病んでいたのだろう
か？ 好みではないこと、時系列的に最終話の日にち設
定に間に合わないことから没設定とした。

剣と笠原のバトルは秋田駅ではなく大曲駅を予定して
いた。大曲駅は『こまち』が進行方向を変えるスイッチ
バック駅で、剣は反対側の運転席に移動する。そのタイ
ミングで笠原に襲われる設定にしようとしたのだ。これ
は連載前半までそのつもりだった。第二話や第三話で碓
氷を大曲の病院に入院させた経緯を語るなど伏線は張っ
ていたのだが、結局没設定となったことでこの伏線は回
収されないままになった。秋田駅の回送列車内でのバト
ルとすることで、他の乗客など第三者を巻き込みにくい
舞台設定にでき、緊迫感が増したのではないだろうか。

笠原については連載当初から碓氷に殺害されるキャラ
クターとして設定していたが、どのタイミングでどのよ
うに碓氷に接近し、そして犯すのかについてはあまり具
体的なアイデアが無いまま書き進めていた。連載の各事
件の連関の間、針に糸を通すように笠原の行動を書き連

ねるのはさすがに難しく、全てを計画することは不可能だった。今になって笠原に着目して連載を読み返すと、もっと効果的な描き方が思いつくこともある。そもそもこの連載自体結末は当初から決めていたものの、どのような経緯で結末に至るのかは作者にも分からなかった。

笠原の行動を全て予見できなくても仕方ない部分はある。碓氷は過去に井上を殺害した自分を責めており、劔がいなかったらそのまま笠原に殺されていただろう。間違っても笠原に逆襲することはしなかったはずだ。劔が笠原に襲われ、生死の境をさまようという展開にしたのは、そこまでしないと碓氷には笠原を殺せないからだ。

劔に重傷を負わせたのにはもう一つ理由がある。碓氷は笠原を殺害するも、最終的には正当防衛が成立し無罪、不起訴となる。作者としてはここで大いに悩んだ。人を殺しておいて正当防衛を成立させるのは簡単ではない。フィクションだから、と言い逃れすることもできなくはない。最終的にそうやって言い逃れせざるを得ないことは予期していた。しかし、それまでに読者がある程度納得させるだけの状況を生み出しておきたいと考えたのだ。結果として、碓氷と劔に対しては笠原をトリガーに苛烈な展開を強要することになった。碓氷に対する性犯罪と劔、碓氷に対する計画的な暴行、殺人未遂。碓氷をパニックに陥れ、故意ではなく不意に殺害してしまうという状況を作り出すことに力を注いだ。

実は、碓氷が過剰防衛として何かしらのペナルティを課されたり、殺人罪として逮捕され数年に渡って劔と離れ離れになる展開も構想した。しかし、いくら劔でもそのような相手が帰ってくるのを待ち続け、生涯の伴侶に選ぶほどの度量を持っているかどうか疑わしい。彼の事だから持っただけでもおかしくはないが、連載を通してそ

こまでの度量を描けていない以上、バッドエンドにつながるルートであり、最終的には却下した。私が描きたいラストシーンから離れてしまうのだ。

劔がいらない中で知恵を出し合い謎を解く居酒屋組、その裏で大変な事態に巻き込まれている碓氷と劔。この落差は読者を振り回すことになり、多くの読者が居酒屋組の読みに集中できなかったと批評会で語ってくれた。それは予期していた反応だったが、だからといって居酒屋組にも手は抜いていない。機会があれば是非、居酒屋での事件にも注目して読んで頂ければと思わずにはいられない。

居酒屋『かま田』を舞台にした作品は連載ではこれが最後になる。本当はもつといういろいろ書きたかったのだが、なかなかうまくいかない。安楽椅子探偵の短編は旧作ではもう少し色々書いていたのだが、連載では想定よりも少なくなってしまった。分量が少なくて比較的書きやすいため、もしかしたらまた何か書く機会があるかもしれない。

第八話 旅立ち（2020年秋冬合併号掲載）

ページ数……13（改稿後）

文字数……18617（改稿後）

連載最後の短編であり、第七話に引き続き碓氷の過去が明らかになる。

この作品では情報の出し方に頭を悩ませた。いきなり碓氷の過去が明らかになるのでは味気ないため、最後の伏線として事件を目撃した唯一の生き残りである劔の記憶を引き合いに出したかった。しかし、当の本人は生死の境をさまよっている。

過去の記憶を呼び出す時にはどうするのだろうか？ 劔の無意識下での記憶反芻をどう描くかを考えてみた。よくある描写では、遠くから自分の姿を第三者目線で眺めているようなものだ。しかし、自分の全体像は自分では見えない。死にかけの状態で自分の姿を客観的に想像できるような力があるとも思えず、このやり方はやめた。

じゃあ、走馬灯のように描くか？ 悪くない考えだが、本当に走馬灯にしてしまうとそのまま死んでしまう。それに、走馬灯の中の劔の視点、行動をどうやって紙上に再現するか？ そう考えるとやはり難しそうだった。

結局、過去の劔の思考を辿るような書き方をすることにした。時折、現在の劔の思考を挟ませることで明晰夢のような風味になった。冒頭は一人称視点と二人称視点のごたごたになったような、少し中途半端な書き方になってしまった。

碓氷の過去については、多くの読者が「誰かを殺していること」「震災に対してトラウマを持っていること」を既に予想、把握して読み進めていた。しかしながら、こ

の両方がほぼ同時に発生したことを予見した批評やコメントは寄せられておらず、その辺を読者はどう考えていたのか気になるところだ。

震災の描写についてはリアルに、それでいて最低限に抑えることにした。確氷の事件を掻き消し、剣に救われたという事実を描きたいのであり、震災そのものを書きたいわけではなかったからだ。それでいて震災の描写を私なりに克明に描こうとしたのは、トリックのためだけに震災を引き合いに出すことは不誠実であり、決して許されないと考えていたためだ。私の筆力でどれだけ真に迫る震災の描写ができたかは分からないが、私なりに当時の新聞やニュース記事、文献などを調べてリアリティを損ねないように注意を払ったつもりだ。批評会でも芋粥先生から指摘を受けたが、震災は決して終わっていないのだ。だからこそ細心の注意を要した。

そこまで苦勞して震災の話を出す必要があるのか、というコメントがある文士から頂いた（誰だったかは失念してしまった）。震災があったからこそ井上殺しは海の藻屑と消え、確氷は罪を被ることもなく、誰も彼女の罪を糾弾できなくなってしまうのだ。震災の描写は絶対条件だった。

震災のシーンの中で、確氷が身投げをしようとして剣に間一髪止められるという場面がある。このシーンについては今読み返すともう少しどうにかしてリアリティと確氷の意識の混濁具合を出せば良かったな、と思う部分だ。海に落下しかける確氷を剣が吊り上げる、という演出にしたのは最終話で川に転落しかける剣を確氷が助けるワンシーンとの対比にしたかったためだ。最も、この時に最終話の演出は確定事項ではなく、こうなればいいな、くらいにしか思っていなかったが。

井上と笠原の交友関係をもっと緻密に描くべきだったかな、と今になって思うことがある。結局、笠原が確氷や剣を襲った動機は怨恨という使い古されたものに過ぎない。もっと所有欲や確氷を人とみなさない不愉快極まりない態度を育んだ経緯について、そして井上殺しを知った経過についてどこかで描写すべきだっただろう。

なぜ描写できなかったのかというと、連載がどのような方向を向いて進むかが分からなかったからだ。この連載は各話読み切りのスタイルであり、それぞれの話ごとにトリックとストーリーを考え、そこに全体のストーリーを被せるようなイメージで書いた。しかし、個別のストーリーに割く知力と体力が多く、全体を通した登場人物の動きを考えるのは確氷と剣の二人が精一杯だったのだ。井上、笠原の件は連載全体を貫く重要な縦糸ではあるが、それについてまで考えることは私の頭脳ではキーパーオーバーだったのだ。

この話にはやはり旧作が存在する。連載では剣の病室で確氷が真相を語るが、旧作では愛媛県南部の卯之町という所に旅行に行き、そこで剣が真相を看破する筋書きだった。卯之町は宇和島に近い海沿いの小さな町で、私が高校生の頃に家族旅行で行った所だ。淡い色合いに染まった夕陽が美しかった。

当初は舞台を下灘駅にしようと考えていた。松山からしばらく列車で行った所にある海沿いの駅、いや、その光景はもはや海の上にある駅と言わなければならない。夕陽が非常に美しい駅で、近年はドラマや観光列車などの影響で知名度が上がっている場所だ。しかし、下灘まで行っているのは私が描きたい最終話のラストシーンに間に合わない。それに、剣が死に瀕したという事実が深く傷付いた確氷が、このこと剣に愛媛までついていくと

も考えられなかった。泣く泣くこのアイデアは没にすることにした。

病室で明らかにされる真実について、確氷と剣がどのように向き合うのか。私はこのシーンについてはまずは特に深く考えず、確氷と剣のアドリブに任せることにした。大まかな二人のスタンスは頭に浮かんでいたが、それをどう言葉にするのかは分からなかった。ならばいつそのこと、二人に丸投げすることにしたのだ。

二人は自分の言葉で語った。確氷は後悔と自責を。剣はそれを受け止め、改めて確氷への愛と尊重を。

出来上がった二人の会話にはあまり手を加えなかった。加筆はしたものの、概ね原型を留めた状態で脱稿した。剣がなだめるシーンへの確氷の再反論は加筆修正した部分だ。

剣はこのシーンで結婚を申し込む。傍から見たら非常識なタイミングではあるが、確氷が自責の念に駆られて剣の元を離れようとしていること、剣が追いかけることができない状態であることを強調するような書き方でカバーした。この辺は、剣がプロポーズをした後に作者として修正を加えたものだ。

剣のプロポーズに際して、私の中には一つの不安があった。確氷は剣に井上殺しの真相を語った。つまり、剣に弱みを見せたのだ。邪な考えではあるが、剣はそれをネタにして確氷に強引な態度を取ることもできたのだ。だからこそ、剣のプロポーズは確氷に対して対等であること、返事は確氷の意思で決めることをどうやって描くに頭を悩ませることになった。

しかし、この心配は杞憂に終わった。読者は剣を信じてくれていたのだ。今まで剣は確氷に対して優しく、そして誠実かつ対等に接してきた。その道筋から今更脱線

することもないだろうし、そもそも剣が有利な立場になりうることに気付きもなかったというコメントが文士から出された時、私は剣を描き続けて良かったと心から思った。彼の優しさと誠実さは、碓氷だけでなくこの連載を、そして作者である私をも救ったのだ。

正直、この第八話の出来はどれくらいなのかは私にも分からない。及第点は獲得できていると思うが、もっと言葉を尽くすべきだったのかもしれないし、もっと言葉に頼らずに話を続けるべきだったのかもしれない。碓氷にはもっと読者の心をえぐることができただろうし、剣にはもっと読者の心を包み込むことができただろう。ただ、それを表現するには現在の私の筆力やインスピレーションでは追い付かない。

ラストの秋田駅のシーンは旧作では卯之町駅だった。碓氷はここから長い放浪の末に自分の生き方を見つけ、秋田に帰還し剣と結ばれるという筋書きが旧作時点での『旅する女』の構想だった。

秋田駅での別れのシーンは劇場版『銀河鉄道999』のラストをオマージュしたつもりだ。この作品は原作漫画でもテレビアニメでもラストは駅で星野鉄郎とメーテルが別れるのだが、劇場版だけ鉄郎がメーテルを乗せた列車を見送るという演出になっている(他二作は鉄郎とメーテルがそれぞれ別々の列車に乗って旅立つ)。

人物紹介の項目で碓氷は少しだけメーテルをモデルにしたと語ったが、今になって思い返してみると思ったよりガッツリとモデルにしていたようだ。

駅は人々の出会いと別れの場だ。新たな世界への旅立ちの場でもあり、懐かしい故郷として出迎えてくれる場でもある。鉄郎とメーテルの旅立ちもメガロポリス駅であり、ハリー・ポッターの旅立ちもキングズ・クロス駅

であり、寅さんの旅立ちも京成線柴又駅だ。私の大学進学に合わせた旅立ちも高知駅だった。駅は入口であり、出口でもある。だからこそ私は駅に浪漫を覚え、碓氷と剣を象徴する場としても駅を使おうと心に決めていた。

碓氷が秋田を出るのは2月の半ばから末頃と設定した。これは剣が年末に襲われ、回復、退院までどれくらいかかるかが分からなかったため適当に設定したものだ。時系列的に矛盾が生じないようにした以外は特に深い意味は無い。

碓氷が旅立つ列車を『こまち28号』にしたのは私なりのこだわりだ。第三話の解説で少し触れたが、2013年から2014年にかけて秋田新幹線は車両の老朽取替の時期に差し掛かっていた。この時に引退を迎える車両をE3系と言うのだが、私が一番好きな新幹線車両なのだ。彼女に敬意を表し、私のペンネームを決定した。作中でも剣を鉄オタにし、JRに入らせることになった「初恋の相手」として描いている。語り出すと止まらなくなるためこの辺で車両の説明を終えるが、剣がJRに入らなければ碓氷に出会うことはなかった。そういう意味では、剣と碓氷とを結んだ車両でもある。

最末期においてE3系の運用は『こまち28号』と『こまち45号』の一往復のみに減少しており、これに碓氷を乗せない手は無かった。E3系は剣の人生を決め、そして最終話のラストシーンで剣の人生の新たな1ページを見守ることになる。私がどうしても書きたいと考えていたラストシーンには、E3系の引退というタイムリミットがあったのだ。

別れのシーンでは山口百恵『いい日旅立ち』の歌詞を挿入した。第二話でもやったことの繰り返しだが、当初はゴダイゴ『The Galaxy Express 999』の歌詞を剣側に

挿入するつもりだった。当初はびったりとはまっていたのだが、推敲を重ねるうちにだんだんしっくりこなくなり、結局は削除した。

第八話でこの連載のタイトル回収ができた。ここから碓氷の力行が始まる。彼女の人生を取り戻す旅が始まるのだ。最終回の目前に辿り着き、私の心中には安堵と不安、そして一抹の寂しさがよぎっていた。

もともと、その後の執筆ではとてもそれどころではなかったのだが。

第九話 南風に吹かれながら・前編（2021年春号掲載）

ページ数……67

文字数……108636（改稿後）

当初、この連載は私が和泉キャンパスにいる間に終わらせようと考えていた。しかし書き進めるうちに段々とその目標が揺らぎ始め、第六話を書き上げる頃には不可能と判断していた。連載を続けるうちに書くべきこと、書きたいものが知らず知らずのうちに増えていたのだ。

最終回の構想を練り始めたのは第六話を書き上げた後燃え尽き症候群になっていた頃からだ。とりあえず目下の第七話と第八話、そしてそのほかの短編の執筆に追われていたためにあまりじっくりと考えることはできなかつたが、合間合間に少しづつ考えを深めていった。

剣の元を離れた確氷が向かうとしたらどこだろうか？ そう考えるうちに、そういうえば確氷の母親について連載であまり触れていないことに気付いた。父親については第五話で触れているが、彼女のアイデンティティには母親も深く関わっている。母親は高知の人間だと設定していたが、その設定に引きずられるように確氷の行先は高知に決まった。私が高知の人間であり、連載で一度地元を舞台にした作品を出してみたい、という願望も大きかったのだが。

最終回だからド派手にやりたいと考えていたが、どうやって確氷パートで尺稼ぎをしたものか、そしてどのように剣の元に帰る決心をさせるか。おぼろげな作品の方向性が見えてくるまでには時間がかかった。

高知つながりで霧島を出して確氷と組ませるのはいい

として、高知を走る列車を使ったトリックを練る……それについて手が無いわけではなかったが、私は躊躇った。構想に浮かんだトリックは既に前例のあるものだったからだ。

私が敬愛する推理小説作家の一人、有栖川有栖は実は鉄オタを公言している。鉄道にまつわるエッセイも出しており、興味のある方は是非読んでみてほしい。そんな氏の処女商業作は鮎川哲也が編集した鉄道推理短編小説アンソロジー『無人踏切』（光文社文庫）に掲載された『やけた線路の上の死体』という短編だ。後に『月光ゲーム』『孤島パズル』『女王国の城』（いずれも創元推理文庫）といったクローズドサークルものの傑作シリーズ、江神二郎シリーズの最初の作品だ。『やけた線路の上の死体』は後に改稿の上『江神二郎の洞察』（創元推理文庫）に収録されている。読み比べると細部が修正されていて面白い。

私が思いついたトリックというのは、そのままこの『やけた線路の上の死体』で使われているものだったのだ。もはやアレンジとすらも言えないレベルであり、さすがにこれをそのまま作品にするのは良くないと考えた。無料公開するものだし、金を取るとしても明大祭かコミケくらいなアマチュア作家の活動だから大目に見てくれるかもしれない、と言われたらそれはそうなのだが、だとしても使うなら別のトリックがいいに決まっている。

しかし、とうとう私は別のトリックを思いつかなかつた。それどころか、脳内に浮かぶ構想はさらに別の作品に近付いていったのだ。

有栖川有栖は高知県の山奥を舞台にした『双頭の悪魔』（創元推理文庫）という長編作品を出している。江神二郎シリーズの長編では三作目に当たるのだが、これは化

け物みたいな作品で、何と「読者への挑戦」が二つも三つも挟まれているのだ。ネタバレになるため内容には触れないが、事件の全体像が私の構想によく似ているのだ。いよいよ有栖川有栖作品のパクリに近付いてきたような感じがしてきた最終回の構想だが、プロ作家も描いたトリックなだけあり、魅力的な設定だった。私はその魅力について屈した。笑っても泣いても連載はこれで完結する。ならば、やりたいようにやるべきだと開き直つたのだ。書きたいものを全部詰め込んでやろうと私は心に決めた。そのせいで大変なことになるのだが。

高知では確氷と霧島に謎解きをさせることにした。しかし、二人とも事件には慣れていても謎解きには慣れない。事件のスケールはどうしても小さめにならざるを得なかつた。しかし、それでは最終回とするにはあまりにも華が無い。どうしたものかと考えるうちに剣にも大活躍させたいと思うようになってきた。

剣と確氷は離れ離れの状態になっている。そのような状況下で二人を別々の事件に巻き込んだら面白いのではないか？ そうすれば最終回にふさわしいド派手かつ重厚な作品にできる。

しかし、私はここで壁にぶち当たることになる。剣側に解かせる事件の構想がなかなか思いつかなかつたのだ。仕方なく見切り発車で確氷パートを先に書き溜めることにした。

今更ながら、この作品は連載だ。各話ごとに独立したバリエーションを持たせるのは作者として読者を楽しませるための義務のようなのだと考えていた。では、今までの連載作品でまだ使っていないミステリのジャンルは何なのか？ 私はそれを考えるうちに、一つの結論に辿り着いた。密室だ。

推理小説には様々な花形が存在する。代表的なものを挙げるだけでも密室、アリバイ工作、孤島もの、見立て殺人、死体消失、ダイイングメッセージなど様々だ。このうちアリバイ工作は概ねどの作品でもやり、孤島ものは第六話で、死体消失はやや変化球ながら第八話でやった。となると、使っていない残りで事件を起こしたいと考えるのは自然な成り行きだった。その中でも一番の花形はといえば、やはり密室と言わざるを得ないだろう。

実は、私はあまり密室ものに興味が無い。もちろん好きなものにはあるが、どうしてもアリバイ物やクロースドサークルといった方面に食指が伸びてしまうのだ。密室などどうせ最後には破られてしまうし、などと少し冷めた目で見てしまいそうになるのだが、それを言い出した謎などどうせ最後には解かれてしまうし、と言いかねない。さすがに良くない見方として封印している。ちなみに、密室物の傑作を読みたいなら密室大好きおじさんことデイクスン・カーの著作がいいだろう。『二つの棺』（ハヤカワ文庫）に出てくる『密室講義』は必読だ。

とはいえ、密室ものを書くのであれば何年ぶりになるだろうか、といった感じだ。そもそもトリックが思いつくのか、そして密室にしたことを説明する動機は思いつくのか。私の不安はそこに収斂した。確氷パートを先に書きながら頭の残りの部分でああでもないこうでもないと考えて日々が続いた。

結局、考えても普通の密室トリックは思い浮かばなかった。言い換えれば、普通ではない密室トリックは思い浮かんだのだ。我ながら馬鹿じゃないのかと疑いたくなるようなものだったが、奇想天外さという意味においては最終回にふさわしい巨大なトリックだ。もはや他に思いつくかぶトリックも無く、なりふり構っていられなかつ

た。確氷には高知の事件を、剣には秋田で密室をあてがうことにした。

剣の事件は館もの、それも奇怪な館ものになった。続行人人の『館シリーズ』に近い、いや、もはやまんま出てきそうな感じのからくりを隠し持った館になった。からくりがあるのなら密室があってもおかしくない。もはや開き直りのようにそう考え、私は剣パートの執筆も始めようと考えた。時期的には第七話の原稿を書いている頃だ。この館に誘う人物として大和の姉として雑誌記者を用意することにした。

高知での確氷の事件についても進展があった。そのまま書いたら既存作品とも重なりなトリックだが、それを犯人の偽装工作にしまえばいいのではないかと考えたのだ。真犯人には堅固なアリバイを用意した上で、偽装工作により偽の犯人を仕立て上げるという展開にすれば、長編にも耐えられるトリックになる。

書き溜めた確氷パートを参考にしつつ、剣パートと同時並行で書き始めたのは2021年2月のこと。プロログも二人分、事件も二人分、登場人物も今までの長編の倍と、最大の事件になることは間違いないかった。私を突き動かしたのは過去に長編を何度も書き上げたという自信や実績というよりも、何としてでもこの連載を書き上げてみせるという執念だったように思える。

私はよく筆の進みが速いと言われる。自覚はあるし、理由も何となくわかつている。ワクワクするのだ。『旅する女』の読者第一号として、今書いている物語がどのような展開を辿るのか、そう考えるといつもたつてもいられず、少しでも早く続きを読みたいと作者である私自身にせがんでしまう。推理小説は作者が思いついたトリックの通りに書けることはまずない。どこかで無理が生じ、

妥協が生じ、穴が生じる。犯人はその穴を隠そうと知力を尽くし、探偵はその穴を突くことで犯人の正体を見破る。その道筋は作者にも書いてみないと分からない。作者自身も物語の全容を知ることなく書き進めるからこそ、好奇心が執筆の燃料となる。

最終回では剣と確氷、それぞれの事件を同時並行で描く。しかし、普通に考えてたまたま別々の事件が同じタイミングで発生し、別々に剣と確氷を巻き込むというのは都合主義が過ぎる。やはり二つの事件にはつながりを持たせたかった。どのようにつながりを持たせるかを考えた結果、私は思い切った策に打って出ることにした。昔の殺人を動機とした二人の犯人の復讐劇、それを交換殺人にしまおうと考えたのだ。

この時点で書く事件は4つ。高知で確氷が解く事件、秋田で剣が解く事件、高知の犯人が復讐を誓うに至った過去の事件、秋田の犯人が復讐を誓うに至った過去の事件だ。この時点でカオスな予感しかしなが、何ということでしょう、これで終わりではなかったのだ。

当初、館のトリックには鉄道模型を使おうと考えていた。大量に敷かれた鉄道模型の線路の上を部屋そのものが移動するというものを想定していたが、そうなると線路の配置を詳細に描く必要がある。しかし、私の技術ではパワーポイントで緻密な配線図を再現するのは不可能だった。そこで、鉄道模型はダミーのトリックとして警察関係者を振り回す小道具に使うことにした。これは後編で活かされることになる。

館の名前はとりあえず『電車館』と仮称したが、そのまま定着してしまった。一階部分の各部屋が独立した鉄道車両となっていて、床下に隠された線路を伝って移動できるというからくりを備えた館だ。これを使い、犯人

は通路に出たり、誰の目に触れることも無く他の部屋に侵入できる、という設定にした。とはいえ、ドアをどう開くか、線路の配置をどうするか、など考えるべきことは山積みだった。この辺は実際の鉄道車両システムをモチーフにしつつ、線路配置については実家で埃をかぶっていたプラレールを引つ張り出して検証した。

こうやって書き進めるうちに、大学の新歓及び対面授業再開が決定し、私は新歓に合わせるタイミングで上京を果たした。1年2カ月ぶりに文士たちと顔を合わせる事ができた。三文の復活の狼煙として、何としてでもこの作品を書き上げてやろうと私は(勝手に)意気込んでいた。

しかし、その思いとは裏腹に私の執筆ペースは格段に落ちることになった。3年生になり本格的なゼミ活動、そして忌々しい就活に追われるようになったのだ。ゼミのレジユメ、就活のエントリーシート、そして原稿の執筆がバッティングするという恐れていた事態に直面した。合間を縫って亀のごとき速度で書き進めてはいたものの、段々と就活や日々の授業の疲れから執筆から遠ざかることになった。

転機が訪れたのは春号のメ切が確定した辺りだ。メ切が決まった時、前編はようやく警察が動き出した辺りで、まだろくに書き上がっていなかった。スケールの前後編にしないと間に合わないという踏み、連載で初となる分割掲載になった。もともとこの読みは甘かったのだが、それについては後編の項で語ろう。

前編では徹底的に剣と碓氷の接触をなくすことを念頭に置いて執筆した。碓氷が秋田に戻ると決心するのは後編にしようと思っていたのだが、話の流れで思いの外あっさり秋田への帰還を決意してしまう。修正する余裕

もなく、そこまで問題も無いだろうと判断して放置した。剣と碓氷の久々の会話は前編のラストに使うことにした。離れていたものが再び繋がりは始めるシーンとして、読者の気を引くことができるだろうと考えたのだ。

霧島と比叡が既婚者として結婚観を語るシーンがあるが、実は批評会で指摘されるまで作者自身もこの二人の対比に気付いていなかった。推理に関わるシーンは根を詰めて書いているが、その反動で推理にあまり絡まないシーンは第六感で書いてしまうことがある。結婚観を語るシーンはそもそも想定すらしていなかったもので、改めて読み返すと驚いてしまう。書いた記憶があまりないのだ。

前後編に分けるのは初の経験だったが、これは私にとってかなりきついものがあつた。一度前編を出してしまえば、後編を書き始めてから前編にまたがる伏線を追加、削除、修正することが不可能だ。後編に進むと事件のクライマックスという重要な場面を控えているのに、執筆の自由度は下がるのだ。トリックを土壇場で微修正することが困難になるというハイリスクなものだった。しかし、もはや後戻りはできなかった。

ゴールデンウィークはひたすら執筆漬けだった。朝から晩までパソコンとにらめっこし、日に一万字というきちがいのようなペースで白い原稿を黒く染めていった。原稿を提出したのはメ切時刻の数分前。編集の負担を考慮するともっと前々から仕上げるべきだったのは分かるが、さすがにスケジュールに無理があつた。後編こそは余裕をもって提出しようと思っていたのだが、その結果は……まあ、読み進めれば分かる。

最終話 南風に吹かれながら・後編(2021年夏号掲載)

ページ数……108

文字数……167954

前編を書き終えた時、私は最終話全体の6割を書き終えたつもりでいた。碓氷の描写をどれくらいにするかによって多少の変動はあるだろうが、事件の伏線仕込みは山場を越えたと考えていた。

さて、改めてページ数と文字数を確認して頂きたい。堂々の過去最長である。私の認識がいかに甘かったかがお分かり頂けるだろう。最後だし書きたいものは全部書いてやろうと決めた結果がこれだ。

正直、私は前後編合わせて120ページを超えるかな、くらいにしか考えていなかった。さて、ここで前後編を合わせたページ数と文字数を、閲覧しよう。

ページ数……175

文字数……276590

いや、まさか。そう思う方もいらっしゃるだろう。かく言う私もその一人だ。どこかで感覚が狂ったか麻痺したか、それとも眠っている間に誰かがこっそり代筆したのかもしれない。ゴーストライターやアシスタントを雇った覚えはないのだが。

実はここまでページ配分予想を外したのにはそれなりの訳がある。私は今まで連載で何人も殺人の被害者を出してきたが、一つ死体を出すたびに何ページ費やされるかを体感的に概ね20ページから25ページくらいだろ

うと考えていたのだ。最終回では前後編合わせて5人殺すことで確定し、そうなる単純計算で100ページから125ページくらいになるだろう、と予測した。剣と碓氷のラストも描くからもうちょっと増えるかもしれないが、それでも大幅に外すことは無いだろうと考えていたのだ。そしてこの有り様である。

とにかく、前編を書き上げた時点で全体の3〜4割くらいしか書き上がっていなかったことになる。後編は前編冒頭で説明した登場人物一覧やあらすじの他にも、前編で掲載したスライドも全て再掲しているため、後編で新しく書いた部分だけを勘案するとさすがに100ページは超えないと思う。思いたい。

こんなことになるとはつゆ知らず、私が後編の執筆に着手したのは前編を提出してから1カ月くらい経ってからだだった。第六話には及ばないとはいえ、ここまでの分量を書き上げるときが冷却期間が必要になったため、しばらく執筆をお休みすることにした。今思えば、それが間違っていた。私は後編でまたしても〆切に追われ、そしてついに〆切を破ることになる。

三文で作品を出す以上、〆切とは切っても切れない関係になる。他のジャンルは知らないが、推理小説は〆切間際に火事場の馬鹿力で書き上げるなどという芸当はまづ不可能だ。トリックを仕上げるのはそんなに簡単ではない。伏線も作者が思っていたより多く張り巡らせることが多い。書き上げてみると、当初想定の数倍くらいの分量に膨れ上がってしまうこともザラだ。推理小説を書きたいのであれば、〆切がはるか彼方にあるうちからバリバリと書き進めるしか無いだろう。

私は鉄オタを自負している以上、人よりも時間に正確であることを心掛けている。それは〆切でも同様で、今

作で1時間ちよつとはいえ〆切を破ってしまったのは痛恨だ。とはいえ、2時間以内に収めたから払い戻しは避けられた(?)。

後編では例によって頭を悩ませることになる。もはやお馴染みの光景だが、どうか飽きたなどと言わずに最後までお付き合いいただきたい。

今作では碓氷の謎解きに鮎川哲也作品の主要キャラの一人、鬼貫警部の姿のオマージュを込めた。鬼貫警部はいわゆる足で稼ぐ探偵で、地道に考えて犯人のアリバイを崩す。この姿に寄せようと、碓氷には高知の街を歩かせ、そして時刻表と格闘させた。作中で出てきた高知市街は私の実家から自転車で10分くらいの所に位置し、私もよく中学高校の行き帰りに通っていた。馴染みの場所を紙上で再現できるのは書いていて楽しかった。

実はこの作品、時刻表をそのまま紙上で再現するという本来の時刻表ミステリのスタイルを初めて再現した。私が作る時刻表トリックは何ページにもまたがる大規模なものが多く、その全てのページを再現するのは毎度かなりきついのだ。だから、少し異端ではあるものの、犯人の乗換に焦点を絞った書き方を貫いていた。しかし、今回碓氷が取り組む時刻表トリックは土讃線だけで完結する。捻りはしたものの、そこまで大規模ではない。後述する理由からも読者にも考えてみてはしく、パワーポイントでの再現に挑戦した。

碓氷は普段こそ剣の相棒役、ワトスン役として立ち回ることが多いだけに、彼女が謎を解く姿を描くのは新鮮であり、作者としてはいささかおっかなびっくりな執筆になった。というのも、今まで読者視線を担うキャラに謎解きをさせたことが無い。普段の探偵役を担う剣も、

謎解きシーンでは他のキャラに視線を交代してもらって

いる。碓氷の思考をどのように描き、かつどのようにトリックを読者に最後まで明かさないか。私はその点に非常に苦労した。この問題を乗り越えるためにも紙幅を割く必要があった。

この作品では「最後だから」と何度も自分に言い聞かせながらやりたいことを全部やってやろうと決めていた。過去の事件から繋がる因縁を出したのも、警察が堂々と間違った推理を展開するのも、剣と碓氷でダブル探偵をやったのも、全て私がやりたいと思ったからやった。そんな私がやりたいことの中でもかなり優先度が高かったものは、「読者への挑戦」だ。

「読者への挑戦」とは、ミステリマニアなら一度は憧れる夢の1ページだ。作者は知力を尽くして犯人を動かし、難解なトリックを弄する。探偵は丹念に伏線を追い求め、そして全ての伏線を看破して、ついに犯人との対決に挑む。そう、全ての伏線が出揃った時こそ、探偵と犯人の対決はクライマックスを迎えるのだ。このクライマックス直前に、作者は「読者への挑戦」を挟み込む。読者には一度立ち止まってもらい、そして考えてもらうのだ。あなたにはこの謎が解けますか？と。

その裏には作者による絶対の自信と、推理の質の高さ、伏線回収の美しさへの自信がある。このコーナーを挟むには、犯人を指摘し、トリックを暴くには必要な情報が全て出揃っていることを保証しなくてはならない。それができる、というだけで推理小説としてはかなり質が高い。そんな美味しい推理を目の前に、読者が探偵になりきることができるチャンスをくれる。それが「読者への挑戦」だ。

「読者への挑戦」が挿入された推理小説を読みたいなら、エラーリー・クイーンの『ローマ帽子の謎』(創元推理

文庫 辺りが古典的作品としておすすめた。有栖川有栖『双頭の悪魔』は、作中に読者への挑戦が三回も出てくるとんでもない作品だが、その面白さは折り紙付きだ。どんでん返しがお好きな方は倉知淳『星降り山荘の殺人』（講談社文庫）を読んでみるといいだろう。私は芋粥先生に勧められてこの本を読んだのだが、氏が語る通り中性子爆弾のような作品だった。

しかし、実はこの最終回は「読者への挑戦」を挟み込むには構造上適していない。というのも、この作品はいくつもの事件が寄り合い所帯のように重なっている。そう、全ての情報を提示する前に一部の事件の謎解きが始まってしまふのだ。

最初、私はどうにかして全ての事件の謎解きを同じタイムミングでやっつけてしまおうと考えた。剣は秋田で、碓氷は高知で同じタイムミングで推理を披露するというものだ。碓氷よりは剣の方が推理慣れしているため、剣の方に過去の事件も解かせることでタイムミングが揃うように調整できるかもしれないと考えたのだ。

しかし、今回は最終回だ。最終回といえば、レギュラーメンバーが全員集合して最終決戦に挑むのがお約束だ。そうなれば、剣の方が先に事件を片付けて碓氷のもとへ駆けつける、といった展開にしたい。そう思っただけに第八話で対比となるシーンを設けた。しかしそうすると、まだ全ての伏線を張り終えないうちに剣が碓氷に先んじて一部の推理を披露することになる。

どちらを取るか私は迷った。「読者への挑戦」を優先するか、最終決戦を優先するか。前者を取れば推理小説としての完成度を、後者を取れば剣と碓氷を巡る物語としての完成度を高めることになる。読者はどちらを好むかは考えるまでも無かった。

結局、私は「読者への挑戦」については妥協することになる。また全ての伏線が出揃ってはいないことを認めたと上で、最後の推理にまでは必ず全ての手掛かりが出現すると書くことにしたのだ。最終回で一番の妥協点はここだった。

剣と碓氷を高知で引き合わせることを優先させたのはもう一つ理由がある。今回の秋田側の犯人である鳥海高知側の犯人である津軽は元々は夫婦であったが、色々あって別れ、そしてよりを戻すべく復讐するというものだ。この二人を引き合わせないことにはさすがの剣も犯行動機に確証を持っていただろうと判断したのだ。しかし、秋田の犯行現場から真犯人である鳥海を連れ出すにはどうにかして警察をやり過ぎさなければならぬ。そのための要員として水郷の事故死という要素を前編から練り込んだ。

前編を書き始めた当初は「読者への挑戦」を入れるかどうかあまり考えておらず、時々思い出しては少し迷い、そして棚上げするという感じだった。その間に剣が偽の推理を展開する伏線を前編から仕込んでしまい、修正ができなくなっていたのだ。「読者への挑戦」を優先してしまつては、そもそも剣が偽の推理を展開する必要がなくなり、作品全体の面白さが減つてしまうと判断せざるを得なかったのだ。

碓氷が最後まで苦しんだのは津軽のアリバイ工作だった。実は、これには私自身も苦しめられた。これを見破る手段を当初はちゃんと用意していたのだが、よりにもよつて後編を書いている時に欠陥が発覚するという絶体絶命の事態に陥つたのだ。かといって、前編に伏線を仕込んでしまつているから今更トリックの変更は不可能。どうにかして原型を損ねない程度に欠陥を穴埋めすべく

奔走することになった。

後編になってトラックの燃料や土砂崩れといった手掛かりが出てきたのはそのためだ。本当は前編からこれらのワードを伏線として仕込むことができればよかったのだが、そればかりは前後編という仕様に阻まれることになった。特に、土砂崩れは犯人にも予期できない天災であり、意地悪な見方をすると作者のご都合主義だ。こつこつ後出しじゃんけんじみた伏線はできれば使いたくなかつたのだが、状況がそれを許さなかつた。せめて犯人の苦闘はそれらしく書こうと奮闘した。

剣が碓氷を救出するべく人間離れた乗り換えを高知に向かつて展開するが、これは日頃の時刻表トリックを作る技術を応用したものだ。時刻表トリックでは意外な乗り換えや遠回り、高速移動、夜間移動による時間稼ぎなどが主な手段になる。剣たちには結構な負担を強いてしまった。

碓氷と津軽の対決については、最終回を書き始める前から書こうと考えていた。やはり最終回だ、碓氷が女子力(物理)を爆発させるシーンは山場として欲しかったのだ。だからこそ壊れかけのベランダ柵を序盤から用意していた。『南風』の屋根に落ち、当初はその屋根の上で決着をつけるつもりだったのだが、この『南風』に剣たちが乗っていたら面白いんじゃないか？ 何ならその屋根から落ちなかつたという事実が偽装工作を暴くものになるのでは？ と思うまでそう時間はかからなかつた。偽装工作の反証については書きぬかかってしまつたが。南風こまら、一生の不覚。

『南風』の話が出た。これは岡山と高知を結ぶ特急列車の名前で、『なんぞう』と読む。秋田新幹線『こまら』同様に私のペンネームの由来となつた列車だ。最終回で

登場する『南風』には2000系という列車が使われていて、私も何度もお世話になったのだが、今年春のダイヤ改正を以て『南風』運用を後継の2700系に譲って2000系は花形の『南風』運用から引退してしまった。寂しい限りではあるが、後継の2700系も素晴らしい車両であり、地元民としては永く活躍を祈るばかりだ。

それにしても、コロナの影響で2000系の最後の一年を地元で過ごせるとは思っていなかった。

実はこの作品を書くにあたり、取材も兼ねて2000系『南風』に乗車した。本来の目的は乗り納めだったのだが、事件の舞台となる豊永付近は動画を撮るなどして連載に向けた準備を進めた。作中で確氷や剣が『南風』に乗った時の描写は全て私の実体験に基づいている。

豊永付近を事件の舞台にしたのは現実の地形が事件を起こすのにふさわしいからだが、その場所はユーチューブに上がっている『南風』の前面展望動画で見つけたものだ。便利な時代になったものだ、と妙な所で感心したのを覚えている。

この最終話タイトルも『南風』にかけたものだが、第八話で連載全体のタイトル回収をした後に作者のペンネーム回収することになるとは、正直な所ちよつと予想外でもあった。しかし実は、この『南風』に吹かれながらというタイトルは別の元ネタがある。ブルーハーツの楽曲『TRAIN TRAIN』の歌詞をそのまま使ったのだ。

この連載では、複数話同時掲載となった第四話と第七話を除き、次回タイトルの予告を入れている。第一話の飯タイトルは『黄昏に星は瞬く』第二話飯タイトルは『命懸けの疾走』第七話飯タイトルは『Nの悲劇』だった。そして最終話飯タイトルは『南風に乗って』だった。

私は連載各話のタイトルについて、特に理由は無いも

のの全く一貫性を持たせない方針で行こうと決めていた。四字熟語っぽくしたり、命令形にしたり、『〇〇の殺人』のような王道にしたり、色々やった。最終回はどうしようかと考えたのだが、このような形に落ち着いた。なお『南風』の読み方は列車名に則ると『なんふう』歌詞に

則ると『みなみかぜ』となる。具体的な読み方は決めていないため、読者には好きな方を各々選んで頂きたい。

この最終話を書くに際して、事件ともう一つ核になるのは確氷の決断だ。彼女は最終的には秋田に戻って剣と結ばれる結末を選ぶのだが、そこに至るまでの筋道をどう描こうかについては、私は正しい答えを持ち合わせていない。誰にも裁くことができない罪に対して確氷はどのように折り合いをつけるのか、どのように自分の幸せを正当化するのか、それについての彼女の考えはやはり彼女に丸投げし、私は彼女の考えを即興で文字に起こしたに過ぎない。

彼女は迷うばかりだった。迷い続けることを選んだ。忘れるのではなく、立ち向かうために忘れないことを、後悔し続ける道を選んだ。彼女は私同様に、これでよかったのだろうかという後ろめたさを捨てることができなかった。彼女が死は罪滅ぼしではないと自覚したこと、彼女が心に留めるべきは過去の事実であり、井上と笠原の人間性そのものではないこと、彼女が導き出した答えは必ずしも贖罪にはならず、満点の回答ではないに違いない。それは確氷瑞穂も認識しているはずだ。だからこ

そ彼女は考え続ける道を選び、それに生涯を捧げることになるだろう。その道は決して平坦でも穏やかでもない。だからこそ、剣と結ばれるくらいはいいだろうと作者としては思うのだ(確氷は罪と幸せは別物で、同時に飲み込むものと解釈しているようだ)。読者の中には、確氷

の決断を逃げと断罪し、納得しない人もいらつしやるだろう。しかし、彼女の旅は始まったばかりだ。私にはその度の全貌を描くことはできない。どうか確氷の逃げに続かない旅路は、読者がそれぞれに遠くから見守って頂きたい。

死は罪滅ぼしにならない、というのは私の信念だ。死刑制度などのように懲罰的に殺されるのであれば話は少し変わってくるが、反省の念から死を選ぶのはどうかと思うのだ。もちろん様々なケースがあるために、全てを一概に語ることはできない。しかし、第八話で確氷が死を選ぼうとしたのは、反省と偽った逃避だったというのは作者として断言する。では、どうすれば罪滅ぼしになるのか。……法で折り合いをつけられない以上、その人次第としか言えないと思う。過去を変えられない以上、自分を変え、未来を変え、他人を変えるしかないのではないだろうか。少なくとも確氷はその道を選んだ。

最終話で確氷は、ベランダから飛び降りようとした津軽を助けようとする。これは、確氷の信念を私なりに暗示しようとしたものだ。剣と出会い、少しずつ変わってきた新たな確氷を確立させる瞬間として、確氷の謎解きシーンを機能させたかった。「罪を償えることはとても幸せな事」と確氷は津軽に告げるが、これだけは罪を償うことができない確氷の口から言われたかった。

謎解きシーン、そしてその後の確氷の帰還はそれぞれ一日で書き上げた。べ切前日と当日にそれぞれ書いたのだが、一日当たりの執筆量がそれぞれ二万字を超えると、怒涛の勢いだっただ。ここまでの速筆を行うことはもう無いだろう。たぶん。

正直、事件が終わった後の確氷の動きについては不完全燃焼感が否めない。大人しく中編だけ出して、後編は

改めて明大祭号や秋号に出すべきだったのかもしれない。しかしそうすると切り位置が「読者への挑戦」しかなく、分量として中途半端になると判断し、多少のやつつけ仕事は仕方ないと割り切って高知を離れる様子を書き上げた。

このシーンが終わると、恐らく二度とこのキャラクターを描くことはない、そう考えると自然にタイピングする指に力が入った。何年も連れ添ってきたキャラクターたちとの別れは、やはり作者としても辛かった。霧島、釜田、大和、比叡……彼女らとの別れは限られた時間の中で精一杯描いたつもりだ。駅を別れの場所にしたのは、そこに駅があるから。鉄道を舞台にこの連載を描いてきた以上、それ以外に選択肢は無かった。

碓氷が鹿児島にある父の墓に参るのは、彼女自身の希望だった。メ切が迫る中、私は最後の最後に彼女のわがままを聞くことにした。いや、駄目だと言っても聞く耳を持つキャラではないのだが、でも、メ切との兼ね合いで慌ただしい墓参になってしまったのは悪いことをしたなあ、と少し後悔している。

井上の死亡届を申請しに行くシーン、震災から3年を迎えるシーンははつきりと分量不足だ。碓氷が秋田に帰る日が震災から3年という節目なのは当初から狙っていた時系列設定なのだが、もつとしっかりと描きたいシーンだった。全てはメ切までに計画的な執筆をしなかった作者の責任だ。

仙台から碓氷が乗った『こまち45号』は、第八話の項で述べた通りの列車だ。これで連載のラストを飾ることは連載当初から有力な案としてあり、そのまま最後まで残ったものだ。ただ、車内で夢オチとはいえ井上と笠原を出すのは考えていなかった。忌々しいことに、あの

クソ忙しい中で二人はひよっこ顔を出したのだ。碓氷のみならず私まで苦しめるか。水樹奈々『Chronicle of 25』を延々と鬼リピしながら私は天を仰いだ。執筆中に私は音楽を聴くのが常だ。

井上と笠原は、連載のオリジナルキャラクターの中では非常に珍しく列車の名前を由来にしていないネーミングだ。私にはこの二人をそれぞれ等身大の人間として描くだけの度量が無く、どうしても憎く汚らわしい存在としてみなすことしかできなかった。だから、実在する列車の名前を由来に名付けることができなかったのだ。

『こまち45号』の車内での碓氷と井上・笠原のやり取りも、今になって読み返すともつと奇烈にしたかった。あの三人の中に渦巻く闇を、過去を、痛みをもつと立体的に描きたかった。しかし、この二人が出てきた時点で既にメ切数分前みたいな状態だった。いつか推敲する日が来ることを祈って、二人を早々に追い出すことにした。結果として分量不足ではあるものの、作品としては締まりのあるラストになったのではないだろうか。そう考えると、彼らなりの功績なのかもしれない。

エピソードで剣は『こまち45号』の運転を終え、運転席からホームに出た所で碓氷と再会する。この登場の仕方は、連載当初からずっと温めていたアイデアだ。実は連載の中で、碓氷は剣の仕事を間近で見たことや体験したことが無い。このエピソードで初めて、剣が運転する列車に碓氷は乗ったのだ。剣が運転士である以上、碓氷を秋田へと導く運命の列車は絶対に剣に託したかったのだ。本当は盛岡から秋田までの道中も描きたかったのだが、残念ながら時間がそれを許さなかった。

紆余曲折はあったものの、ラストシーンだけは私が長年考え続けていたものとはほぼ同じ形になった。ここまで

書き上げた時、私の心には感慨の念が浮かんだ……と言えば真つ赤な嘘になる。メ切を破るという三文に入つて初めての事態に、感慨にふけっている暇など全く無かつたのが正直なところだ。

エピソードの後のおまけ、碓氷瑞穂ではなく剣瑞穂として語られるあのシーンは、実は私が一年生の頃に図書館のパソコンで書いた掌編を多少推敲した上でコピーしたものだ(図書館のパソコンを使つたのは、私が持つているパソコンがぶつ壊れていたためだ。メーカーにも故障原因が分からず、本当に「何もしていないのに壊れた」ケースだった。作品データはSSDメモリに保存してあったため無事だった。どうかこの文章をお読みの皆様も、データのバックアップだけはしっかりと確保しておいて頂きたい。そして明●●トの推奨パソコンには手を出さないで頂きたい)。最終話のラストに載せるかどうか迷つたのだが、後日あのシーンだけ出しても読者からはなんのこっちゃという反応しか来そうにないと考え、掲載することにした。

ラストを『トワイライトエクスプレス』で飾つたのは、剣には『こまち』があるように碓氷には『トワイライトエクスプレス』があるためだ。剣の人生を変え、そして碓氷と結ばれるという人生の節目を彩つた『こまち』そのオマージュとして、碓氷の人生を変え、そして剣と共に新たな生を授かるという人生の節目を『トワイライトエクスプレス』には彩つてもらおうと考えたのだ。最後の伏線回収は、第二話の執筆時から続くおよそ二年弱越しのものとなった。

連載が完結を迎えたのは2021年8月14日、メ切から1時間ちよつとが過ぎた午後8時過ぎ。一年以上に渡る長旅の終えた時、私は息も絶え絶えで臍輪炎になり

かけていた。

批評会での評価にも触れておこう。連載が完結すると
いう伝説（中根先生談）を目の前に、批評はさすがに普
段通りとはいかなかった。大勢から祝福されつつ、その
高揚感の中でも批評内容そのものは割と辛口だった。と
にかく何でもかんでも詰め込みすぎたのだ。事件の規模
やトリックが秋田・高知双方共に大きすぎたことや、剣
と確氷の見せ場をそれぞれふんだんに設けたことで、複
数の読者がキャパオーバーを訴える事態になった。やは
り大人しく前中後編の三部作にしておけばよかったのか
もしれない。

一番激賞して下さったのは中根先生だ。実は、連載初
期において「人間の書き込みが足りない」と苦言を呈し
たのも中根先生だった。その先生から「推理小説と人間
ドラマの融合」という言葉を頂くことができた。二年以
上かけて、私はようやく小説執筆における人間の機微を
掴みかけることができたのかもしれない。それは、連載
の完結というジंकクス破りをはるかに超える宝だと断言
できる。

先生は私が三文に入った当初、こつも語っていた。「推
理小説に限らず、様々な分野に挑んでほしい」と。この
言葉は私にとって大きな糧になった。推理小説を本業に
しつつ、それ以外の分野も『旅する女』にふんだんに詰
め込むことができたのは、この言葉があつてこそだ。

この場を借りて、『旅する女』各話を批評して下さった
文士の皆様に心から御礼申し上げる。皆様もまた、『旅す
る女』の作者の一員である。

終わりに

ここまで長々と各作品について思い出話や裏話を語っ
てきたが、書きたい事を全部書くというのはこういうこ
とだ。どうか文士の皆様には、自分の欲望の赴くままに
筆を走らせてみてほしい。爽快だ。

おまけとして、剣たちが今どうしているかを少しだけ
記しておこう。といっても、実のところ私も詳しいこと
は知らない。言えるとすれば、剣夫妻たちは今も元気に
やっているとということ。居酒屋『かま田』もコロナごと
きに負けず頑張っているし、剣夫妻は子育てに日々奮闘
しているだろう。霧島も相変わらず活躍しているはずだ。
現在でも事件に巻き込まれているかどうかは分からない
が、もしかしたらみんな気が向いた時にまた私の元に顔
を出して、三文文集でその活躍を披露する日が来るかも
もしれない。その時にはどうか、読者の皆様には暖かく出
迎えてほしいと願うばかりだ。

最後に。繰り返しになるが、この連載は私一人で書き
上げたものではない。大勢の三文文士の協力があつて、
ようやく完結させることができたものだ。もしもこの文
章を読んでいるあなたが三文で執筆をしたいというので
あれば、連載をしたいというのであれば、何よりも他の
文士との縁を、他の文士からの批評を大事にしてほしい。
情熱と知力は筆力として、べ切と読者は超えるべきハー
ドルとして、そして三文での縁は道標として、あなたの
背中を押すだろう。あなたを磨いてくれるだろう。あな
たを支えてくれるだろう。

批評は立ち向かうべき敵ではない。読者から贈られる
武器だ。自分の未熟さを補強する血肉になってくれる声

援だ。傷付くこともあるだろう、凹むこともあるだろう。
しかし、だ。どうか、どうか筆を折らないでほしい。読
者はあなたを待っている。

三文での執筆を前に怖気づく必要はない。己の手から
紡ぎ出される嘘の勝負に勝ち負けはない、下手くそもな
い。ただあるとすれば、未熟かどうか。伸びしろがある
かどうか。今が下手なのは未熟なだけであり、それは可
能性の果てに行きついていないというだけのことだ。恥
じることはないし、恥じてはならない。それは自らへの、
応援してくれる読者への、産み落としたキャラクターへ
の裏切りだ。三文文士よ、胸を張れ。私はこの連載が未
熟な作品であることを認めこそすれ、決して恥じたりは
しない。

三文での連載の前に尻込みする必要はない。三文で連
載は完結しない」というジंकクスはもはや過去の遺物だ。
この傷だらけの『旅する女』という連載を超える素晴ら
しい連載作品が、いつか三文には現れるだろう。それを
書き上げるのは、今これを読んでいるあなたかもしれない。
い。

この連載に少しでも憧れて下さるのであれば、作者と
して身に余る光栄だ。ぜひその憧れを両手に、今すぐ三
文規格のファイルを開き、ペンネームを打ち込み、真っ
白なページを真っ黒にしてほしい。己の物語は、己の手
でしか紡ぐことができないのだから。

拙稿が、そして『旅する女』が、未来の三文文士たち
の旅の一助となることを願って。